駆逐艦松 一代奮戦記【暁の新生帝国外伝第三弾】

弾井　寛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
駆逐艦松　一代奮戦記【暁の新生帝国外伝第三弾】

【Ｎコード】
Ｎ４９１１Ｅ

【作者名】
弾井　寛

【あらすじ】
暁の新生帝国の外伝第三弾！昭和十七年四月、珊瑚海海戦を前に新たに駆逐隊が編制され、最新鋭駆逐艦松型が配備された。その駆逐艦乗り達の見た世界初の空母決戦を描く！

第1章　―駆逐艦松―

松型駆逐艦―

謎の組織、帝国科学技術研究所（以後、帝科研）から提示された設計図を基にブロック工法という新たな手法により建造された新型護衛駆逐艦。

諸元

全長百ｍ
全幅　九．三五ｍ
常備排水量　千六百五十ｔ
機関　艦本式三号一〇型過給器付きディーゼル四基二軸　三万二千馬力
最大速力　時速五十九．二ｋｍ
航続距離　三十ｋｍで一万ｋｍ
乗員　二百十一名
武装　六十五口径二式十糎連装高角砲×二基
二十五ｍｍ連装機銃×六基
二式爆雷発射機×四基　（改良型ヘッジホッグ）
二二号対空対水上捜索電探　探知距離最大三百ｋｍ
二式電探射撃管制盤　（四二号捕捉電探連動）　四七号電探逆探知機
三号回転式音波探知機　三号音波探信儀

昭和十七年四月二十日―
広島県呉市帝国海軍呉工廠―

二日前の帝都檄撃戦の話で盛り上がる工員達の前に、一人の海軍将校が立っていた。

彼の名は香月新作、
先日三十二歳になったばかりで、砲術学校に再入校し最新の砲戦技術を学び、新たな配属先である駆逐艦松に砲術長として本日付けで着任して来たのである。

これは彼の目を通して見る、大日本帝国海軍海上護衛総隊護衛駆逐隊、通称「車引き」の新造駆逐艦［松］に配属された海の男達の活躍を描いた物語である。

帝国海軍は艦艇の進水時に艤装員長を任命して、その艦の艤装を完成させ引き続き艦長に任命するのが恒例となっており、この時の駆逐艦松の艤装員長は海兵五十七期の戸高（とだか）少佐であり、着任してほぼ一ヶ月で艦の艤装も終わり、チラホラと乗組員達が着任しはじめていた。

四月二十日現在まで松に配属されて来たのは、砲術長の俺の他に以下の者達であった。

艦長　戸高（はじめ）一少佐

航海長　大谷勇夫大尉（おおたにいさお）
水雷長　佐竹翔大尉（さたけしょう）
機関長　小倉正輝大尉（おぐらまさき）

いや～、一癖も二癖もありそうな連中だ。

以上の他に士官が七名、下士官が四十名ほど、兵が百名余りが着任しており残りの兵も明日中には皆、到着の予定だそうだ。

俺は艦橋に上がり戸高艦長に着任の申告をした後、艦長に連れられ艦長室へと向かった。

艦長室は艦橋の下の操舵室の更に下、上甲板と同じ階にあり他の艦と変わらぬ大きさの部屋であった。

「香月大尉、君がこの艦では最先任士官のようでな当直士官を任せるよ、後の事はよろしく頼む。」

「はッ！了解しました。」

とは言ってみたが、いやはや俺は艦長に面倒な事をすっかり押し付けられてしまったのである。

明日はいよいよ、呉工廠からの引き渡し式が行われその後、駆逐艦松は我々のものとなり制式な海軍艦艇と成るのであり、それまではただの船なのである。

その為、引き渡し式は我々にとって非常に重要な儀式であったのだ。

それを翌日に控え、艦長から一切を任された俺は本日から当直制をひく事にし、乗組員の名簿に目を通して特務少尉安藤作造の名を見つけ、彼に当直士官をやってもらう事にした。

安藤少尉とは前に駆逐艦磯風で一緒であり、下士官からの叩き上げである彼であれば古参で経験も有り、艦内の下士官、兵をまとめて行けると思ったのだ。

それらの事を相談するべく俺は、艦橋に士官集合をかけた。

彼らとはまったくの初対面であったが、同じ駆逐艦乗りなのだからすぐに打ち解けられるであろうと思い、艦橋で待っているとまず最初に上がって来たのは水雷長の佐竹大尉であった。

「はじめまして、水雷長を仰せつかった佐竹です！」

「こちらこそ、砲術長の香月です。海兵六十一期で先任らしいですよ。」

「ならば二期先輩ですね、自分は六十三期ですから、ひとつよろしくお願いいたします！」

実に元気のいい奴である。

彼とは、なんとなく馬が合いそうであった。

「失礼します。香月大尉！お久しぶりです！」

「安藤少尉！元気そうですな、また世話になりますよ。」

「とんでもない！お世話になるのはこっちです。また、よろしくお願いいたします。」

と俺と安藤少尉は海軍式の挙手の敬礼をしてから、がっちりと握手した。

やはり叩き上げの特務少尉がおり、それも顔見知りであると心強いものである。

間もなくして航海長の大谷大尉と機関長の小倉大尉、各兵科の士官ら総勢十名が艦橋に揃ったので、俺から順番に挨拶を兼ねて自己紹介をした。

それが終わると早速、当直の件を話し各分隊への徹底を命じた。

駆逐艦は砲術科を第一分隊、水雷科を第二分隊、航海・運用・電信・医務を第三分隊、機関科を第四分隊に区分され、それぞれ分隊の配置によって班が編成されていた。

例えば第一分隊第一班とは、一番砲塔の班員達の班なのである。

我々は艦橋で“別れ”の敬礼をして解散し、それぞれの分隊へと散って行った。

俺は砲術科の先任下士官、國本兵曹長に声を掛け、比較的に広い錨甲板に分隊整列をかけさせた。

第一分隊は機関科の第四分隊に次いで所帯が多く、五十名以上が配属されており体格が大きく腕節の強い者が優先的に配置されていたのである。

何故、我が分隊に腕節の強い連中が多いかと言うと長十糎砲の砲弾が二十ｋｇ以上有る為であった。

十二・七糎砲の砲弾は弾頭と炸薬とに別れていたが、長十糎砲の砲弾は弾頭と炸薬が薬莢で一体化されており、発射速度の高速化を計っていたからであり、半自動装填装置が有るとはいえそれに砲弾を供給するのは、あくまでも人力で行っていたからだ。

という訳で屈強な兵達が錨甲板に整列したところで、俺は訓示をはじめた。

「諸君！駆逐艦松へよく来てくれた。私は本艦の砲術長を仰せつかった香月新作である。諸君らも気付いていると思うが本艦は帝国海軍の最新鋭艦であり、装備されておる武装は帝国の技術の粋を極めた最新の兵器である。であるからして、その操作には細心の注意を払って当たってもらいたい！これより我々は駆逐艦松と命運を共にするのである。諸君らは全力でその職務に精励せよ！以上！」

その後、國本兵曹長から当直制への移行が知らされ、分隊は解散した。

それからは通常の駆逐艦業務が始まった。

帝国海軍では一日の課業がきっちりと決められており、時間が来るとラッパの合図で一斉に行動するのである。

そして夕方の五時五分前になったところで号令がかかった。

「課業止め、五分前。」

乗組員達はこの号令を聞くと、それまで行っていた作業を止め終業の準備をするのである。

「課業止め。食事、第一種軍装に着替え。」

当直下士官らが号笛を鳴らし、大声で叫びながら艦内を駆け回った。

駆逐艦松での一足早い海軍生活が始まったのだ。

これからは全てこの号令によって、乗組員は動くのである。

俺も夕食を採る為、士官控室に向かった。

軍隊では士官と下士官以下の食事ははっきりと区別されており、狭い駆逐艦と言えども同じであった。

戸高艦長が席に着き、我々も腰を降ろして夕食が始まった。

「香月砲術長、明日の本艦の予定を皆に聞かせてやってくれ。」

艦長からの指示により、俺は引き渡し式を含めた予定を話した。

明日はかなり忙しい日と成りそうであり、まだ着任早々の乗組員達を相手に、出港を想定した操艦訓練及び戦闘訓練を行うのだ。

とにかく、我々にあまり時間は残されてはいなかった。

一週間後、千葉の館山基地へと出航して対空射撃訓練を行う様、

厳命されていたのである。

幸いにして本艦への配属者は、二月に撃沈された駆逐艦夏潮の乗組員達がかなりおり、練度がすこぶる高ったのが救いであった。

「カンカン、カンカン」

「おっと、もうこんな時間か、俺はそろそろ失礼するよ。書類を片付けなきゃならんでな。」

午後六時を知らせる、四点鐘の鐘の音を聞いた艦長が部屋を出て行った。

四点鐘の鐘とは駆逐艦に出入りする為の舷門にある時計を基準として、午前零時から三十分毎に鐘を鳴らして乗組員に時刻を知らせているのだ。

午前零時三十分に「カン」と鳴り、これを一点鐘、一時に「カンカン」と鳴り二点鐘という具合に、午前四時の八点鐘まで続きこれを一周期として、また四時三十分に「カン」と鳴り元に戻るのである。

「別科止め、武技遊戯許す、酒保開け。」

当直下士官が号令を叫びながら艦内を走って行った。

別科とは食事の事であり、武技遊戯とは別に剣道や柔道をやるわけではなく、乗組員の唯一の自由時間の事であった。

酒保はもちろん酒の事で、他にも石鹸やタオルなどの日用品を扱

う売店の様な所だ。

「それでは、明日の事もあるし解散としようか。」

俺は皆にそう言って席を立ち、艦橋のすぐ後ろにある戦闘指揮所へ向かった。

そこは、駆逐艦としては初めて設置された部屋であり、今後の対空、対艦、対潜戦闘時の中枢となる新たな部署であったのだ。

戦闘指揮所に行くと、そこには電測員達がおり忙しそうに電探を操作していた。

邪魔しては悪いので、しばらくその様子を艦橋から眺め、ソッとそこを離れ自室に戻ろうとすると、艦橋へ当直に任じた安藤少尉が入って来た。

「砲術長、そろそろ巡検の時間になりますのでお願い致します。」

いつの間にか時間が経って九時近くになっていたのだ。

巡検とは海軍式の点呼であり、初日の今夜は我が艦の先任士官である俺の所にお鉢が回って来たのである。

俺は当直士官、当直下士官、当直当番兵達を引き連れ駆逐艦松の隅々を見て廻る事になった。

ついでに艦の装備と概況も見ておく事にした。

まずは最先端にある、錨甲板に行き錨鎖等に異常がないかを見て、

次にそのすぐ後ろにあり松の主兵装でもある長十糎連装高角の一番砲塔を確認した。

更にその後ろ艦橋のすぐ前には帝国海軍最新の対潜兵器、二式爆雷発射機の一、二番投射基が配置されていた。

そこから艦内に降りて、甲板下にある前部兵員室から巡検を行い、各乗組員が就寝しているのを順次確認し、続いて艦中央にある機関室へとつながる人一人がやっと通れる隔壁ハッチをくぐり、機関室を通って艦後部兵員室へと向かった。

軍艦は皆そうであるが艦の甲板下にある要所要所を繋ぐ扉は、浸水を防ぐ為に防水扉が設置されており、被害の軽減を計るよう作られていたのだ。

また、我が艦の主機であるディーゼル機関の配置は二基が縦に別々に設置されており、一基が損傷しても残りの一基で航行できるよう設計されていた為、生存性が高く多くの同型艦が戦場から生還し得たのだった。

機関室を出た我々、当直一同は後部兵員室へと入り巡検を続けて行った。

通常海軍艦艇の兵達にはベッドはほとんど無く、ハンモックという吊床を吊って就寝しており、朝の総員起こしの時に全て片付けられるのである。

艦後部には一段下にもう一室兵員室が有ったが、どの部屋も駆逐艦特有の天井が低く狭苦しいのは同じであった。

兵員室に吊床がある者はまだ良くて、中には通路や砲塔下の揚弾庫にまで吊床を吊っている者もいたくらいなのである。

海軍の駆逐艦乗り達はこの様な劣悪環境下において、不平も言わず日夜厳しい訓練にひたすら耐え、海軍の縁の下の力持ちよろしく任務に励んでいたのだった。

俺はそんな思いを抱きつつ、上甲板に上がり艦最後尾にある二式爆雷発射機、三、四番投射基の異常の有無を確認し二番砲塔に向かった。

二番砲塔の前部には一段高くなった所に、三番銃座の二十五mm三連装対空機銃座が二基あり千五百m以内に接近した敵機の迎撃にあたるのである。

この三連装機銃座は改良型の二式であり、上下照準と左右照準が一人で行えるよう電動式の照準装置が備えられていたが、通常は二式射撃照準機で二基とも射撃管制されていたのだ。

その更に前部に後部マスト、後部煙突と続き艦中央近くに探照灯、前部煙突、そして対空機銃二基あり二番銃座と呼ばれていた。

そこから前部マストまでの間に何故か七mほどの空間があり、全乗組員の集合にはうってつけの場所であった。

我が艦の前部マストは他の艦と違い、かなりがっちりとした造りになっており、高さ十五mほどの所に各種電探のアンテナが設置されていた。

そしてその前から上甲板が一段と高くなり、他艦に比べ格段に大

きな艦橋がそびえ立っていたのである。

そこで一通り巡検が終了し

「巡検、終わり！別れ！」

と敬礼をしながら号令を掛けると、当直下士官が敬礼もそこそこに駆け足で大声を出しながら

「巡検終わり！たばこ盆出せ！」

と叫んで回るのである。

駆逐艦の一日はこうして終わり俺は自室へと戻り日記をつけはじめた。

課業、はじめ！

「カンカン、カン」

朝五時半の三点鐘の音で目が覚めた。

忙しい一日の始まりである。

まずは顔を洗い身支度を整え、艦橋へと顔を出した。

「おはようございます！香月大尉！」

「おはよう、大谷大尉。ずいぶんと早いな。」

「はぁ、本日は初の出航訓練が有りますから。」

「そうだったな、俺の第一分隊もどんなものかひとつ、訓練してみるか。」

そんな会話をしていると、

「総員起こし、五分前。」

と当直下士官の号令が聞こえて来た。

「おはよう、諸君。」

戸高艦長が艦橋に上がって来たのだ。

「おはようございます！」

俺と航海長が挨拶して本日の予定などの打ち合わせをしていると、

「総員起こし！総員吊り床納め！」

の号令が掛り、艦内が俄然騒がしくなった。

「総員上甲板！体操始め！」

艦橋から上甲板を見下ろすと、乗組員がワラワラと艦内から出て来て一斉に海軍体操をはじめた。

その先頭に立って体操を指導しているのは、第三分隊長の佐竹大尉ではないか。

元気のいい、面白い男だなぁと思いつつその姿を眺めていると、

「砲術長、電探射撃管制盤の調子はどうかな。」

と艦長が新型装備について案配を尋ねて来た。

戸高艦長は根っから水雷屋だと聞いていたので、その仕組みを詳しく話した。

二式電探射撃管制盤は本艦の目玉とも言っていい兵装であり、帝国海軍の技術の粋を極めた新兵器であったのだ。

原理は従来の射撃管制盤と変わらないものであったが入出力方法が画期的であり、四二号捕捉電探が捉えた目標諸元が自動的に管制

盤に送られ、目標の未来位置を計算してその結果を高角砲に送り、自動的に照準させるのである。

これは例え夜中の真っ黒な暗闇の中でも、一寸先も見えない濃い霧の真っ只中でも、電探は関係なく照準可能であり一方的に攻撃できる事を示していた。

ましてその砲が、毎分六十発の長十糎高角砲が連装で二基あるのだから、毎秒四発の十糎砲弾の威力たるや、凄まじいものである。

それらを一通り艦長に説明していると、航海長の大谷大尉や水雷長の佐竹大尉、機関長の小倉大尉までもがフムフムと俺の説明に納得しているではないか。

皆、初めて聞く新兵器の性能に興味津々といったところであったのだ。

「総員、手を洗え！」

の号令が掛り、いつの間にか朝食の時間がきていた。

「では諸君、食事としようか。」

艦長が皆に声を掛け、真っ先に艦橋から出て行った。

「食事、事業服に着替え！」

この号令で皆、朝食を食べ始めた。

海軍では全ての行動が号令によって始まり、号令で終わるのであ

るがその基準となるのが舷門にある時計であり、三十分毎に鳴らされる鐘の音なのである。

「砲術長、引き渡し式は十時からだったな。」

「はい、九時四十五分には総員を上甲板に整列させる予定ですが。」

「であればよろしい。」

艦長は一応、確認したかったらしい。

引き渡し式は海軍の昔から行われているひとつの儀式であり、これが終わって初めて駆逐艦松は軍艦になるのであり、それまでは戸高艦長も制式にはまだ艦長ではなく艤装委員長なのであり、我々も乗組員ではないのである。

通常であれば艦に乗組員を慣熟させる為に引き渡し式後、三ヶ月程の練成期間が与えられるのだが、戦時という事もあり我々には一週間とその期間が限られていたのだ。

そういう事情もあり、昨日から仮に海軍時間による艦艇業務を始めたのである。

「では諸君、午前の課業は九時三十分までに終了させる様に。」

「はッ！」

そう言うと艦長は部屋を出て行った。

「それでは各分隊ごとに訓練を始めようではないか。」

俺は皆の顔を見回し、席を立った。

「課業始め、五分前！」

俺は艦橋へ上がり、前日の当直士官の安藤少尉から引き継ぎを受け艦、人員共に異常の無い事を確認しそれを艦長へ報告した後、上甲板へ降りて前部マスト後方の広場へ行った。

やがて艦橋から課業始めのラッパが高らかに鳴り響き、

「課業始め！水兵員整列上甲板！」

の号令が掛かった。

すると艦内から乗組員が脱兎の如く駆け集まり、各分隊ごとに整列した。

分隊の先頭にはそれぞれの先任下士官がおり敬礼しながら、

「第一分隊集合終わり！」

「第二分隊集合終わり！」

「第三分隊集合終わり！」

と集合の報告を受けた副直将校は、敬礼と共に本日の当直将校である俺に

「集合よろしい！」

と報告して、それに対し俺は

「予定訓練、かかれ！」

と号令を発すると、乗組員は蜘蛛の子を散らす様に走り去って行った。

こうして駆逐艦松の一日は始まるのである。

俺は第一分隊の待つ、錨甲板に行き小さな台に上がり訓示を行った。

「諸君！駆逐艦松の第一分隊へよく来た。帝国は今、大戦の真っ最中である。この戦に勝つ為には、我々帝国軍人がその命を呈して職務を全うせねばならぬのである。今日から貴様らの命は俺が預かる！」

「それではこれより戦闘訓練を行う！訓練、戦闘配置につけ！」

号令一下、第一分隊は駆け足で所定の部署に向かって行った。

俺は艦橋上の砲戦指揮所に上がり、各部署の報告を待ちながら適当な目標を選んだ。

すると沖合から戦艦らしき大型艦が近づいて来るのが見え、十五糎双眼鏡で確認してみるとやはり戦艦伊勢と日向であった。

今時何故だ？と思いつつも、丁度良い目標だったのでこれに決めた。

「一番砲塔配置よし！」

「一番銃座配置よし！」

などと次々と報告が入り、全員が配置に付いた事を確認して、

「合戦準備昼戦に備え！砲撃戦用意！」

「右砲戦、右百十度、戦艦、一番艦を狙え！」

と下令すると、方位盤にしがみ付いている國本兵曹長が、照準器を戦艦に向けてグルッと回すとそれと連動し、すぐ後ろにある三m測距儀が旋回し、目標との距離を測った。

その後一、二番砲塔がグゥーッと右に旋回をはじめ、戦艦を睨んで仰角を上げた。

「こちら測距儀、距離一五。」

「こちら射撃盤、準備よし！」

「トップ了解、撃ち方始め！」

の号令で方位盤の國本兵曹長が、叫びながら引金を引いた。

「てェーッ！」

実戦であればこの時一、二番連装砲四門が同時に火を吹くのである。

この時は訓練だった為、砲から発砲はされず一連の手順の流れが確認されたのだ。

軍艦の艦砲は対艦砲戦の場合トップ（砲戦指揮所）に居る方位盤射手が目標を狙い、それを測距儀で距離を測りそれらの射撃諸元は戦闘指揮所にある二式射撃管制盤に電気的に入力され、更に我が艦の針路、速度、風向、風速、自艦の動揺、地球の自転速度なども入力された上で目標の未来位置を割り出し、どの角度で砲を発砲するかを計算しその結果が各砲塔へ電気的に送られ照準されて、トップの射手が引金を引くと一斉に発砲されるのである。

発砲された砲弾が着弾する瞬間にベルが鳴り、トップに居る砲術長に知らされ着弾地点の位置により、砲術長はその修正量を二式射撃管制盤に入力させ再度、発砲し命中を期するまでこれを続けるのだ。

これが軍艦が行う方位盤射撃の方法である。

もし被弾や何らかの理由で方位盤射撃が行えない場合は、砲側射撃といって各砲塔が個別に照準し射撃するのであるが、命中率は大幅に下がり、まず当たらなかった。

目標が航空機の場合は照準はトップの方位盤の代わりに電探が行い、観測は砲術長が行うのである。

航空機は移動速度が早く、測距儀などの照準機器が追いつかないからだ。

その電探射撃は我が海軍で新たに採用された射撃法であり、俺も

ついこの前、砲術学校に行き電探射撃法を伝授されたばかりだったので、本艦で実際に訓練するのは初めてであった。

もちろん他の乗組員は、電探を見るのも初めてという連中が居たくらいであるから、電探射撃を知っている者は電測員達と俺ぐらいしかいなかったのだ。

「対空戦用意！電探射撃！」

「目標、右九十度、水上機！」

丁度、右の空に艦偵とおぼしき水上機が接近して来たのを俺は見つけ、咄嗟に目標としたのである。

「こちら捜索電探！目標捕捉！方位〇九〇、距離五、機数一、速度二百五十、高度三千。」

「こちら捕捉電探！目標捕捉！射撃管制盤入力良し！」

「トップ了解！撃ち方始め！」

「てェーッ！カチッ！」

射手が引金を引く音がしたが、今度も訓練なので発砲はされなかった。

初めてにしては、上出来であった。

電測員は昨日、夜遅くまで訓練していた成果が出たのか、今の突然の対空戦にも良く対応していた。

「撃ち方辞め！各砲、状況しらせぃッ！」

「一番砲塔異常なし！」

「二番砲塔異常なし！」

各砲塔から異常なしの報告を受け、時計を見ると九時を過ぎていたので訓練終了を告げた。

「訓練終了、用具納め！」

訓練を終え艦橋へ降り、艦長に第一分隊の訓練終了を報告した後、俺は自室へ戻り第一種軍装へ着替え身支度を整えてから再度、艦橋へ上がると艦長や他の士官達も着替えの為か、艦橋には航海科の中尉しか居なかった。

「カンカン、カン」

「第一種軍装着替え！総員上甲板！」

九時三十分を知らせる三点鐘が鳴り、当直下士官が集合の号令を叫びながら上甲板を走り去って行った。

俺は中尉と一緒に上甲板へ降り、第一分隊の集合している列の前に立ち先任下士官の報告を待っていると、間もなくして

「第一分隊集合終わり！」

の報告があり答礼をしてから戸高艦長へ報告する為、回れ右をし

「第一分隊準備良し！」

と敬礼をしながら報告した。

他の分隊からも報告を受けた艦長は

「よろしい、直ちに上陸はじめ！」

と号令をかけ、答礼もそこそこに舷門へ向かい海軍工廠から来た人物と打ち合わせをはじめた。

俺は号令をかけて、第一分隊から順に埠頭へと乗組員を上陸させると、軍楽隊がトラックに乗ってやって来た。

俺は乗組員を各分隊ごとに二列縦隊に整列させ、引き渡し式が始まる時間まで待つ事にした。

軍楽隊も我々の向かい側に並び演奏の準備をはじめた。

すると周りからぞろぞろと、駆逐艦松の建造に関わったと見られる工員達が集まって来たではないか。

間もなくして海軍工廠の職員達も埠頭に集まりだし、艦長と海軍工廠の代表者が我々の前に来た。

「きよぉーつけッ！」

先任将校である俺が号令をかけた。

「艦長に対し、カシラ～、ナカ！」

乗組員達は一斉に頭だけを艦長に向け、艦長は我々に向かってグルリと答礼をしながら見回した。

「ナオレーッ！」

我々の目の前で軍艦旗が艦長に手渡され、艦長はそれをしっかりと受け取った。

次に、艦長以下全員が松に乗り込み艦尾甲板へと移動し、軍艦旗の掲揚を敬礼しながら行った。

こうして引き渡し式は無事終了し、我々駆逐艦松乗組員は直ちにそれぞれの持ち場へ駆け去って行った。

俺は出港後に行う照準演習に備えて、トップへ上がった。

トップから錨甲板を見下ろすと、水雷長の佐竹大尉が錨作業を指揮しているのが見え、

「海水ポンプかかれ！錨を揚げ！」

の号令で消火用ホースが二本引っ張り出され、巻き揚がって来る鎖に勢い良く放水されていき、泥がきれいに落とされていった。

巻き揚がって来る鎖のひとつひとつを、運用科員が小さいハンマーでチンチンと叩き傷がないか確かめており、ある程度の所で鎖が止まり皆艦橋の方を伺った。

すると艦橋から出港用意を知らせるラッパが鳴り響いて、

「出港用意！錨を揚げ！」

の号令が発せられた。

また錨が巻き揚げられだし、水雷長が艦橋に向かって

「立ち錨！、…起き錨！」

と報告すると、すかさず艦橋から航海長の大谷大尉が

「右後進微速、左前進半速、おもーかーじ！」

と号令をかけると、ディーゼル機関が唸りをあげ出して、艦が静かに動きだし

「両舷前進半速！もどーせー！」

の号令で、錨が完全に巻き揚げられきれいに泥が洗い落とされて、

「用具納め！」

となり慌ただしくホースなどが片づけられ

「解散！別れ！」

の水雷長の号令で解散となった。

埠頭では先ほどの軍楽隊が軍艦マーチを景気良く奏でており、海軍工廠の職員らが帽振れをして我々を見送っており、手空きの乗組員がそれに答えて大きく手を振っていた。

これでようやく我が駆逐艦松は我々のものとなり、帝国海軍艦艇として制式に編入され第五十一護衛艦隊、第一〇一駆逐隊の旗艦を務める事となったのである。

駆逐艦松が動き出すと、戸高艦長が操艦を交代した。

「両舷前進半速、面舵（右へ回頭）。」

との号令に操舵長が復唱しながらすぐ下の操舵室へつながる伝声管に向かって、

「リョーゲン、ゼンシンハンソーク、オモーカージ。」

と言うと操舵室の操舵員が舵を二十度に回転させ、復唱して来る

「オモカジ、フタジューードー。」

続いて艦長が

「両舷前進原速、戻せ。」」

「リョーゲン、ゼンシンゲンソーク、モドーセー。」

という具合で伝声管を通じて操舵室とやり取りして艦艇は操艦されるのである。

海軍軍艦には艦隊行動における速力の規定があり、所属する艦隊により変化はあるが、通常使用された速力は

両舷微速十一・一ｋｍ（四ｋｎ）、
同半速十六・六五ｋｍ（九ｋｎ）、
同原速二十二・二ｋｍ（十二ｋｎ）、
同強速二十七・七五ｋｍ（十五ｋｎ）

とされており、戦闘速度は最大速度により変化するが我が艦の場合、

第一戦速三十三．三ｋｍ（十八ｋｎ）、
第二戦速三十八．八五ｋｍ（二十一ｋｎ）、
第三戦速四十四．四ｋｍ（二十四ｋｎ）、
第四戦速四十九．九五ｋｍ（二十七ｋｎ）、
第五戦速五十五．五ｋｍ（三十ｋｎ）

となっており駆逐艦としては物足りないが護衛艦としてはまあまあの速力であった。

その後我が、駆逐艦松は埠頭を離れ呉軍港を出る為、早瀬の瀬戸と呼ばれる狭い水道に向かってゆっくりと進んで行った。

俺は主砲の照準訓練の為、艦橋からトップへと上がった。

「照準訓練、配置につけ！」

号令と共にブザーが鳴らされ、照準に必要な各砲員が配置についた。

照準訓練とは艦の出港の際必ず行われる訓練であり、砲搭の責任者である砲員長と砲搭を目標に向かって旋回させる旋回手、砲の発砲を行う射手、目標との距離を測定する照尺手がそれぞれの配置につき、訓練を行うのである。

「一番砲搭配置よし！」

「二番砲搭配置よし！」

「合戦準備昼戦に備え！」

「左砲戦、左九十度、巡洋艦一番艦狙え！」

俺は続けざまに命令を下した。

二式六十五口径十糎連装高角砲は、トップにある射撃盤と測距儀が目標を狙うと電気信号がそれぞれの砲搭へ流れ、砲側の受信機の赤針が振れ目標に照準すべき角度を示し、砲の実角度を示す白針をそれに合わせるべく各員は急いで操作するのだ。

この両方の針が一致しなければ砲弾は発砲されないのである。

それが一致したかどうかは、トップの射手の基にあるランプが赤から青に変わる事で判る仕組みになっていた。

「二番砲搭！何やっとる遅いぞ！」

射手の先任下士官が怒鳴り声をあげている。

「撃ち方はじめ！」

「てェーッ！」

訓練、訓練、また訓練

いつの間にか艦は柱島が見える瀬戸内海に出て来て、揺れが激しくなって来た。

その上、船足まで早くなり強速二十七・七五ｋｍを遥かに越えて戦闘速度の第三戦速四十四・四ｋｍを出しているようである。

こうなると艦の動揺が激しくなり砲の照準が付けにくくなるのだ。

「撃ち方待て！」

俺は柱島の向こう側から現れて来た艦影を見て、頼もしく思い目標を変更した。

「目標変え、左三十度、航空母艦！撃ち方はじめ！」

なんとそこに現れたのは今や帝国海軍を代表する艦隊となった、第一機動部隊の四隻の母艦達ではないか！

俺は双眼鏡を覗いて、その雄姿に見入っていると

「一番、二番とも遊んどるのかぁッ！早ようせんかッ！」

先任が砲員達をどやしつけていた。

「よ～し！てェーッ！」

大空からは聞き慣れた爆音が響いて来る

「撃ち方待て、対空戦用意！電探射撃！目標、右三十度、十機編隊、撃ち方はじめ！」

一、二番砲搭がグワーンと左から右へと旋回し、砲身に仰角がかかり九七艦攻の編隊へ狙いが付けられる。

「よし！今度は合格や！てェーッ！」

壮観な眺めである。

米英の艦隊をことごとく撃破した、我が機動部隊を前に訓練を忘れて見とれている俺がいた。

その後、照準訓練を終えた我が駆逐艦松は瀬戸内海を抜け豊後水道を通り、左に佐田岬を見ながら水道を抜けて、太平洋へと波を掻き分け進んで行った。

目指すは、千ｋｍほど先の海上護衛総隊司令部がある横須賀鎮守府であった。

時速二十七強ｋｍの強速で一日半の行程であるが、やるべき事は山ほどあり目の回る航海だった。

外洋に出ると艦の動揺は更に激しくなり、上下だけではなくローリングやピッチングが加わり、山の様な大波が艦首に突き刺さり艦全体が震えるのである。

船、特に駆逐艦の様な小舟に乗り慣れてない者は凄まじい船酔いに襲われるのだ。

案の定、艦橋の見張り員の中でも一人が、十五糎双眼鏡にしがみ付きながらふらついて時折下を向いて、ゲーッとやってる奴がおり当直下士官から

「こんな嵐でもない波で酔っていて駆逐艦乗りが務まるか！気合いが足らん！バカもん！」

と言われ、しこたまビンタを喰らっている新兵がおり、可哀想でもあったがこればかりは慣れるしかないのであった。

俺は外洋に出た事もあり、初の演習弾（火薬の入って無い弾丸）による発砲訓練を行う事にして、艦長にその旨を報告しトップへと上がって緊急ブザーを押した。

「訓練！配置につけ！」

「一番配置よし！」

「二番配置よし！」

「合戦準備昼戦に備え！砲撃戦用意！」

「右砲戦、右六十度、輸送船！」

演習弾とはいえ実際に発砲するのだから、実在する艦船を狙う訳にはいかないので疑似目標を設定しているのだ。

「撃ち方はじめ！」

「てェーッ！」

ドドォーン！

やはり実包による発砲は気分が良いものだ。

「左三十度に漂流物！」

見張り員から報告があった。

俺はすかさず双眼鏡で確認するとかなり大きな木材である。

「良しッ！先任、あれを狙おうではないか！撃ち方待て！目標変更、左砲戦、左三十度、潜水艦、撃ち方はじめ！」

「測距儀遅いぞ！各砲遅れるな！」

先任下士官にも思わず力が入る、何も無い所を狙うよりも実際に有る物を狙う方が張り合いがでるのだ。

「良し！てェーッ！」

俺は十五糎双眼鏡にしがみ付き、着弾時間を待った。

「着弾…、今！ビーッ！」

ブザーが鳴ると共に木材のかなり手前で四つの小さな水柱が一瞬上がった。

「高め三、次！」

ドドォーン！

今度は遠すぎて右にずれた。

「下げ一、左寄せ二、次」

ドドォーン！

これはドンピシャである。

「急げ！」

連射が始まった。

ドンドンドンドン―

毎分六十発の十糎砲の軽快な発射音が響き渡った。

双眼鏡を覗くと木材の周りに小さな水柱が無数に上がっていた。

「砲術長！実弾を使ってみんか。」

その声に振り返ると戸高艦長が立っているではないか！

「よろしいでしょうか？」

「構わんよ、周りには我が艦しか居らんしな。」

「ではッ！撃ち方待て！各砲実弾に変え！着発信管用意！」

我が艦の艦長は話の解る人であった。

訓練はより実戦に近くなければ訓練たり得ないのである！

砲員達もそうなのだ。

演習弾を扱うのと実戦を扱うのとは、気の使い方が違うのである。

荒波に揉まれて艦の動揺が激しい時に、実戦を誤って壁にぶつけた時は死が待っているのだ。

ましてそれが実戦であればなおさらであり普段から実弾に慣れていなければ、それが現実のものとなるであった。

「一番良し！」

「二番良し！」

艦長が号令をかけた。

「撃ち方はじめ！」

俺はそれに答えて命令した。

「急げ！」

ドンドンドンドン―

各砲が発砲をはじめた。

着弾は双眼鏡を見なくても確認出来た。

目標となった木材の周りに立て続けに爆発が起こり、全てが莢又していたのである。

トップには、艦長の他にもいつの間にか手空きの将校達が上がって来ていた。

「撃ち方待て！」

たった三秒ほどの全力射撃で、木材は跡形も無くなっていた。

「見事だよ！我が艦砲は。なあ砲術長！」

艦長に褒められ俺は気分が良かった。

「ついでに対空射撃もしてみんか？」

にこやかな顔つきで艦長が言って来た。

「了解しました！対空戦用意、左九十度、遅延信管三千に設定。」

さあ、大変である。

今、各砲塔内では半自動装填装置に収められている、二十発の即応砲弾の着発信管を遅延信管に、交換している真最中なのだ。

これが、二式六十五口径十糎高角砲の唯一の欠点と言えるものだった。

「一番砲塔準備よし！」

予想外に早く用意が出来たようである。

これは一番砲員の練度の高さの表れであった。

「二番砲塔準備よし！」

「良し、砲撃はじめ！」

「急げ！」

「てェーッ！」

ドンドンドン―

パッパッパッ―

距離三千m、高度二千m辺りにキレイな弾幕が花開いた。

「砲術長、来週の演習はこの調子で頼んだぞ。」

そうなのだ、連合艦隊司令長官の山本大将にこの新型砲と二式電探射撃管制盤の威力を披露しなければならないのだ。

海上護衛総隊

昭和十七年四月一日、横須賀鎮守府に海上護衛総隊が開隊された。

初代司令長官は伊藤整一中将が就任し、海軍における補給全般と帝国の海上輸送の全てに責任を負う組織として、連合艦隊と同等の権限を与えられ傘下に航空部隊をも持つ、最終的には海軍で最大の組織に発展した部隊であった。

しかし、開隊当時それを予想した者は誰一人としていなかったのだ。

その証拠に四月二十日現在、所属する艦艇は護衛艦が十隻と水上機母艦が一隻だけであった。

とにもかくにも我が駆逐艦松は、そこの新設された第五十一護衛艦隊の第一〇一駆逐隊に配属の命を受け、横須賀鎮守府に着いた二十二日に制式に編入され、駆逐隊の旗艦に指定された。

旗艦と言えば、駆逐隊司令部が乗り込んで来るのであり、狭い我が艦がなおさら狭くなるのだから乗組員はあまり歓迎していなかった。

しかし、これは一時的な処置で護衛空母の摩周が我が艦隊に編入され次第、司令部はそちらへ移動するとの事であった。

空母の話を聞いた時、俺は驚きを隠せなかった。

帝国海軍が護衛艦隊という裏方の日の当たらない、ともすれば忘れ去られる様な部隊に、これからの海軍の主力となる艦種を配属した首脳部の決断に…。

まあ、空母と言っても艦隊随伴の正規空母と違い、タンカー改造の護衛空母であるらしいから、我々の様な護衛艦隊に回せるのだろうがどう言う理由にせよ、我々には有難い事であった。

輸送船の護衛の際、空母が有るのと無いのでは天と地程の差があるのだ。

これは実際の護衛任務に就いた時、俺達がその身を持って思い知らされる事になるのである。

とあれ、我が駆逐艦松は途中訓練を重ねながら横須賀基地を目指し、翌日の夜無事に基地に到着したのだ。

それからの一週間、昼夜を問わず訓練に訓練を重ね、いよいよ山本長官らをお迎えする日の朝が来た。

「カンカン、カン」

午前五時半を知らせる三点鐘の音で目が覚めた。

海軍の朝は早い。

六時には総員起こしの号令が掛り、総員上甲板、体操始めの号令で一斉に海軍体操をやり、それが終わると

「宮城に向かって、拝礼！」

の号令で皇居の方向に向かって総員で一礼するのである。

その後、水兵達は艦内の清掃に取り掛かり、我々将校は艦橋でその日の課業や訓練について、打ち合わせを行う。

本日四月二十九日は、我が海軍のお偉方が乗艦して来て、我が艦の二式六十五口径十糎高角砲の対空射撃訓練を見学するのだ。

「間もなく我が艦に一〇一駆逐隊司令、原中佐が乗艦されるが各員は失礼の無いよう伝達を徹底してもらいたい。また、本日はいよいよ連合艦隊司令長官が我々の訓練の成果をご覧になられる予定もあるので、各分隊は心して軍務に当たるように！以上！」

俺は本日の我が艦の予定を皆に話し、艦長からの訓示を促すように会釈をした。

「諸君、短い期間であったがよくぞここまで練度を上げてくれた。本日は存分にその成果を示してもらいたい、以上。」

この後、我々は朝食を採り第一種軍装に着替えて、駆逐隊司令の到着を待った。

間もなくして司令を乗せた車が到着する旨の連絡があり、艦長と先任将校の俺が舷門に降りて当直将校らと整列して、原司令の登舷礼を行いお迎えをしたのである。

「きょーつけッ！司令に対し敬礼！」

司令乗艦の号笛が鳴り響き、原司令が駆逐艦松に乗り込んで来た。

「うむ、戸高艦長よろしく願います。」

司令は答礼をして艦長と握手し、

「こちらこそよろしくお願い致します。」

と艦長がそれに答え司令を艦橋へ案内した。

艦長と俺は先日、横須賀にある第五十一護衛艦隊司令部で原司令と対面しており、この日の打ち合わせをしていたのである。

すると丁度、八時の軍艦旗掲揚のラッパが鳴った。

「パッパ、パッパカパー」

司令以下、全員が軍艦旗の上がる艦尾を向き気を付けの姿勢で、挙手の敬礼を行った。

この時ばかりは司令から一水兵に至るまで、全員がその場で作業を止め直立不動の姿勢を取り、軍艦旗が見える者はそれに向かって敬礼をせねば為らぬのだ。

その後、我々は艦橋に上がり航海長や水雷長、機関長を紹介し早速出航の準備をはじめた。

艦長が司令と本日の実弾演習の打ち合わせをしている間に、航海長がてきぱきと号令を下し出航の準備が進められた。

「艦長、出航準備完了しました。」

「司令、本艦は準備が整いました。」

「他の艦はどうかな？」

「竹より報告、我、出航準備よし。梅、桃より報告、我、出航準備よし。以上！」

最近新しく装備された、艦隊電話からの報告を通信員が司令に報告した。

これまでは艦隊行動時の旗艦から各艦への行動指令はメインマストの旗りゅう信号で示す事と発光信号、手旗信号、やり取りに時間のかかる無電でのモールス信号しか方法がなかったが、短距離艦隊電話が装備されてからは艦隊運動程式、第三章の通則、第一節が改訂され艦隊電話が追加されたのである。

ラバウルへ

これにより艦隊運動の信号に艦隊電話が追加され、音声による号令が可能となり素早い意思表示が伝達できる様になったのだ。

「うむ各艦に伝達、これより出航せよ。とな。」

原司令からの命令を通信員が各艦に伝え、同時に旗りゅう信号がマストに上がった。

「出航用意！」

戸高艦長が大谷航海長に命じた。

「出航用意！錨揚げ！」

航海長が艦橋の窓から錨甲板に向かって怒鳴った。

「立ち錨！…起き錨！」

錨甲板から水雷長の怒声が聞こえると、艦長が自ら命じる。

「右後進微速、左前進半速、面舵。」

機関が唸りを上げ艦が徐々に動き出すと

「両舷前進半速、戻せ。」

の号令で艦はゆっくりと前進し始めた。

艦橋の後ろの窓を見ると、駆逐艦竹、梅、桃が次々と我が艦に習って前進を始めるのが見え、改めて我が駆逐艦松が第一〇一駆逐隊の旗艦である事を実感したのだった。

その後、俺はトップに上がりいつも通り艦砲の照準訓練を行い、艦橋へ降りると司令の姿が見えなかった。

どうやらすぐ後ろの戦闘指揮所へ様子を見に行ったらしい。

「しかし艦長、駆逐艦というのに魚雷が無いのは寂しい限りですね。」

と水雷長の佐竹大尉が愚痴を言い始めた。

水雷長は何かに付け、魚雷が無い事を不満げに周りに漏らしていた。

確かに駆逐艦は、艦隊戦において敵大型艦に肉迫して一撃必殺の酸素魚雷を叩き込み、小艦よく大艦を葬るが駆逐艦乗りの伝統とされ訓練して来たのだから無理もなかった。

「これも時代の流れなんだろうて、なぁ、砲術長。」

艦長は感慨深げに天を仰いだ。

そうなのである。

今大戦において、緒戦こそ艦隊同士の砲雷戦が生起したが、今後は電波兵器と航空機の発達により艦隊が接近する前に、航空攻撃に晒されるであろう事から夜間や不意遭遇戦でもない限り、酸素魚雷を

使う機会は激減するのだ。

艦長も水雷出身であったから、大谷大尉の言い分が痛い程解るのだろう。

「おぉ砲術長、降りて来たか。今、電探射撃盤の説明を聞いたがそれほど威力があるのかね？」

原司令が聞いて来たので、俺は身振り手振りでその作動原理を話し、後は百聞は一見にしかずと午後からの実射を見て判断してもらう事にした。

そんな会話をしている内に艦隊は館山基地へ到着し、水上機が並ぶ桟橋の横に四隻揃って錨を投じた。

「通信員、連合艦隊司令部へ打電。第一〇一駆逐隊、館山基地へ到着せり。とな。」

と司令が言った。

その日は、連合艦隊司令長官らをお迎えし無事に対空射撃訓練を終え、夜は急遽連合艦隊司令において夕食会が開かれ、我々も呼ばれて長官から忌憚のない意見が求められた。

そこの席で噂に上がっていた護衛空母摩周が、長官より正式に我が艦隊に配備される事が発表されると共に、会食後南方戦線への補給任務が言い渡されたのである。

帝国の命運を握ると言われた、ラバウル航空隊への重要物資輸送の護衛を任されたのだ。

いよいよ実戦で、我が艦隊の真価が問われる時がやって来た。

我々は翌日、不要物件を横須賀で陸揚げし実弾、食糧を満載し護衛空母摩周、第一〇二駆逐隊の四隻と合流して、第五十一艦隊は旗艦を摩周にして全九隻がここに勢揃いしたのである。

そして昭和十七年四月三十日、我が第五十一艦隊は横須賀基地を出航し、東京湾から来た高速輸送船十隻と海上で船団を組み、一路四千ｋｍ以上先の赤道を越えた遥か彼方に浮かぶ、ニューブリテン島ラバウルを目指したのだった。

合流した高速輸送船は、摩周と同じブロック工法で建造された一万ｔ級の新型輸送船であり、巡航速度は他の輸送船では考えられない時速三十ｋｍとなっており、我が艦隊と船団を組むには最適であったのだ。

我が艦隊は護衛空母摩周を先頭に輸送船を川の字に三、四、三隻で並べて進ませ、その周りを駆逐艦が輪形陣でぐるりと囲む様にして航行を始めた。

「これより、警戒航行に入る、艦内哨戒第三配備とせよ！」

艦内哨戒には第一から第三まであり、第三配備は三交代で二時間づつそれぞれの戦闘部署に付くのである。

航行初日は、まだ帝国本土に近いという事もあり、摩周艦載機の零戦との無線電話による連携訓練を行い、敵潜水艦発見の報で直ちに駆逐艦二隻一組で現場海域に向かい、二式爆雷をこれに叩き込むといった訓練などを実施しながら、夜間となり警戒を厳しくし之の字

航行を行った。

この之の字航行とは、ただ真っ直ぐに航行するのではなく、不意の間隔で針路を変えつつジグザグに航行する事で、もし敵潜水艦に発見され追尾されても敵が魚雷発射の射点に付きづらくする効果がある、とされていたからだった。

しかし、時代は変わりつつあった…。

総員！戦闘配置！

「ブーッ！ブーッ！」

異常を知らせる警報ブザーが鳴った！

「艦橋、こちら戦闘指揮所。電探に感あり！左三十度、距離二万、潜水艦の司令塔らしい！」

「総員戦闘配置！」

「直ちに旗艦に報告！我、敵潜らしきを発見せり！」

予兆は十分程前からあった。

その時、電測員から俺に声が掛かったので戦闘指揮所に顔を出すと、水平線に波とは違う感度があると言うのだ。

俺も一緒になって、表示画面を見ると確かに波間に感度が現れたり、消えたりしている。

そこで捜索電探では、ちちがあかないので目標捕捉電探（こちらの方が感度や精度が高い）で探してみろと言うと、今度は捜索電探からも消えてしまったのである。

可能性としては、艦艇では無く潜水艦の司令塔などの電波反射の低いものが考えられたので、引き続き捕捉電探でその辺りを警戒せ

よと言っておいたのだ。

「駆逐艦竹より入電！我、電探に感あり。敵潜らしい！」

「通信員！艦隊電話はどうか！応答はあるかッ！」

艦橋は喧騒の只中にあった。

当直将校の俺は矢継ぎ早に報告を受け、命令を下した。

「どうした？敵潜かッ！」

戸高艦長や航海長らが慌てて艦橋に上がって来た。

「はッ！只今確認中です！」

「艦橋、こちら戦闘指揮所。目標接近中、方位変わらず、距離一万八千！」

「旗艦摩周より入電！敵味方識別すまで撃ち方待て。以上！」

「艦長！お聞きの通りです。」

「うむ、総員、合戦準備夜戦に備え！砲雷撃戦用意！」

「見張り員どうか！まだ発見出来んのか！」

水雷長が怒鳴った。

この海域には味方の潜水艦も活動していた為、相撃ちだけはして

はならなかったのだ。

「電測員！逆探はどうか！」

「逆探に感無し！」

今時の帝国潜水艦は全て電探を装備しており、夜間航行中であれば電探を使わない訳はなかった。

「う～ん、まずは間違いないだろうが念のためだ。探照灯用意！」

「艦長！探照灯ですか？」

俺は驚く様にして聞き返した。

こちらから敵に、わざわざ我が艦の位置を教えてやるのか？と暗に問うたのではないかと思い艦橋に居た皆は、俺を凝視した。

海軍では命令は絶対であり、命令の意味を問う事も厳禁とされていた。

しかし、当の俺は聞き違いのないよう復唱したつもりだったのだ。

「砲術長！急げ！それと電探射撃の用意もな敵潜と判明次第、撃つ！」

「はッ！探照灯用意！目標左三十度、潜水艦！」

俺はそう叫ぶと艦橋を出てトップへと上がり、戦闘指揮所へ繋がる伝声管を通して命じた。

「電探射撃用意！左砲戦、左三十度、潜水艦！」

「捕捉電探射撃準備よし！」

「一番砲塔、準備よし！」

「二番砲塔、準備よし！」

「探照灯、準備よし！」

俺は十五糎双眼鏡を覗き込み、敵潜が居ると思われる辺りを探して見たが真っ暗闇の海上から、潜水艦らしき姿を見つけ出すのは至難の技であった。

その時、三m測距儀から伝声管を通じて報告して来た。

「砲術長、左四十二度、距離一六五、潜水艦の司令塔を発見。」

さすが、我が艦一の眼力の持ち主である。

俺も双眼鏡をその位置に向け、星明かりを頼りにじっくりと探すとうっすらとではあるが、司令塔の影が見えて来た。

「測距儀、そっちから艦種の確認は出来んか？」

「はい、確か識別表の新しく配布されたものに載っていた、敵潜水艦のガトー級だと思われますがはっきりとは分かりません！」

「良し！艦橋！こちらトップ。潜水艦を確認！探照灯、照射します

！」

伝声管を通して艦橋に報告するとすぐ返事が返って来た。

「探照灯、照射はじめ！」

それを聞いて俺は、伝声管に探照灯員へ通じる艦内電話のマイクを近づけ、復唱と命令を同時にした。

「探照灯！照射はじめ！」

その途端、パァッ！っと一筋のまばゆい光の帯が、暗闇の海面を真昼の様に照らし出した！

いたッ！間違いなく敵潜である。

ガトー級だッ！

「トップ！こちら艦橋！撃ち方はじめ！」

「撃ち方はじめッ！」

「てェーッ！」

俺は艦橋からの号令を聞くなり、怒鳴って射手の國本先任曹長に命じていた。

ドォン！ドォン！ドォン！

たちまち我が艦の前後の高角砲が連射をはじめた！

毎分六十発の砲四門が、毎秒四発の十糎砲弾を敵潜に叩き込んでいった。

探照灯に浮かび上がった潜水艦の司令塔の周りに、おびただしい水柱が上がりたちまち水煙で敵潜は見えなくなってしまった。

「撃ち方待て！」

水煙が収まった時、敵潜の姿はかき消えていた。

俺はすぐ様、艦橋へ降り戦闘指揮所へ入り

「敵潜はどうか！」

と聞くと

「両舷機関停止！取舵。」

艦長が俺の顔を見てから艦橋に向かってに命令を発し、僚艦の竹にも機関を停止するよう通信員の藤一曹に命じた。

水中音波探知機で敵潜を探る為には、艦から発する雑音を消さねばならなかったからだ。

「戻せ、宜候。」

「感有り！正面、近づく。」

水測員が聴音機を、耳に押しあてながら報告をした。

「一、二番投射機、こちら戦闘指揮所、雷撃戦よーい。」

水雷長が艦内電話で静かに命令していると、

「更に近づく、針路そのまま、距離一〇〇。」

「両舷前進微速。」

艦長が敵潜へと艦を進めさせた。

シーンと静まり返っていた艦にディーゼル機関の音が甦り、独特のリズムを刻み出すと艦はゆっくりと前進をはじめた。

「触接を失いました。」

「まずは距離を詰めるか、両舷前進一杯！」

二式爆雷発射機の射程は二百ｍしかなかった為、十ｋｍある敵潜との間合いを詰める事にしたのである。

しかしこの間、聴音機は自艦が出すディーゼル機関音の為、ほとんど使い物にならないが潜行した潜水艦の水中速力はせいぜい時速十ｋｍ程なので、だいたいの位置は特定出来た。

十分後、艦長は機関を停止させ海中に潜む敵潜を探らさせた。

水測員の大友一曹は、自慢の耳で聴音機から聞こえてくる雑音の中に、潜水艦特有のモーター音を捕らえた。

「感あり！右六十度、遠ざかる。」

「敵潜の位置を特定する、音波探信儀用意！」

艦長は大友一曹に命じ、探信音を発信させた。

ピィーン、…カァーン！

一・三秒後に反射音が返って来た。

空気中の音速は毎秒三百四十mであるが、水中は毎秒千五百mという速度で音波は進んで返って来るので、計算すると敵潜は千m先に潜行していたのだ。

「両舷前進強速、面舵！」

我が艦は更に探信音を発しながら、敵潜が潜む辺りへ接近して行った。

「敵潜、浮き上がりつつあります。方位正面、距離五、深度二十。」

「まずいなぁ、苦し紛れに魚雷を発射して来るかもしれんな。」

艦長の予言は間もなくして、的中したのである。

「敵潜！魚雷発射管を開けています！」

それまで静かに報告していた大友一曹が、大声で言った。

「両舷前進一杯！」

「敵潜！魚雷を発射しました！」

戸高艦長が叫ぶのと、大友一曹が悲鳴に近い声をあげたのはほぼ同時であった！

「爆雷！撃ち方はじめ！」

「一番！てェーッ！」

ドドドッ！

二式爆雷発射機から三十六発の小型爆雷が、一斉に夜空へと打ち上げられた。

爆雷が着水する前に艦の機関が唸り出し、一気に加速しはじめ敵潜へと向かって行き、打ち上げられた爆雷が弧を描いて海面へ落ちると、毎秒七mの速さで海中へと沈降して行き、一発でも命中すれば全弾が爆発するのである。

が、しかし爆発は起きなかった。

敵の魚雷も発射距離が短かった為、浅深度まで浮き上がる前に艦底を通過して行った。

「ちッ、続いて四番投射機！後方百八十度！よーいッ！」

佐竹水雷長が艦内電話に怒鳴った。

「敵潜の位置はどうか！」

水雷長の問いに、大友一曹が答えた。

「我が艦の真下！…、今、後方に抜けました！距離五十m、百m、百五十m！」

「てェーッ！」

ドッドッドッ！

艦後方にある爆雷発射機から小型爆雷が敵潜に向けて、再度発射された。

ヒューン、パシャパシャパシャッ！

すると間もなく腹に響く連続した振動が有り、海面が白く盛り上がると同時に無数の爆発音が聞こえて来た！

「やったゾーッ！バンザーイ！」

艦内のあちこちから歓声が揚がった。

二式爆雷は一発でも敵潜に命中すると、他の爆雷も全て一斉に爆発するのである。

「敵潜の様子はどうか？」

「はッ！まだ海中の雑音がひどく聴き取れません。」

爆雷が爆発するとその辺りの海域は掻き乱され、水中聴音機は使

い物にならなくなるのだ。

しばらくして、大友一曹の耳に金属のきしむ独特の音が聞こえて来た。

「敵潜の圧壊音を確認！」

「確実に撃沈したか確認する、探信儀を打て。」

佐竹水雷長が命じた。

水中から返って来た探信音は、沈み逝く潜水艦の様子を我々に伝え深度が三百mを超えたところで

「間違いないな、戦闘終了！用具納め！」

戸高艦長は号令を発し、大谷航海長に戦闘詳報の記入を命じた。

「ガトー級一隻を撃沈すとな。」

総員！戦闘配置！（後書き）

御意見、御感想をお聞かせ下さい。

戦闘後

その後、艦内哨戒第三配備となり俺が一直目の当直将校をして艦橋にいると、機関長の小倉大尉が珍しく上がって来た。

「やぁ、先任。さっきはお手柄だったねぇ。」

「いえいえ、あれは佐竹大尉の手柄なんですよ。」

小倉大尉は俺より年上で、兵学校も一期上であったが何故か俺の方が先に大尉に昇進しており、この艦の先任となっていたのだ。

「そうだったのか。それにしても我が艦の艦砲はすごい発射速度だな、俺もいろんな駆逐艦に乗ってきたがあんな機関砲みたいなのは初めて聴いたよ。」

俺はまるで自分が褒められた様な気持になり、満更悪い気はしなかった。

小倉大尉は機関長だった為、戦闘配置は艦の底であり艦砲の射撃は見るのではなく、聴くなのだ。

「そういえば、機関の方も新型のディーゼルでしたよね。前の駆逐艦よりも反応が速い気がするのですが。」

「あぁ、あれは例の研究所の設計らしくてな、今までのディーゼルの問題点を全て解決した傑作機関だよ、あれは…。ま、その分整備の手間も掛かるがな。」

「そうなんですか！大きい声じゃあ言えないんですが、実は二式長十糎高角砲や二式電探射撃管制盤、捜索電探もその研究所が開発したと言う噂なんですよ。」

「ほう、香月大尉のところもそうだったか、例の研究所がなぁ。」

帝国科学研究所、通称帝科研は恐れおおくも天皇陛下が設立なされたと言われる、帝国の英知を極めた俊英達が集まり数々の新兵器を帝国軍にもたらし、我が艦を産み出した研究所だった。

一介の駆逐艦乗りの俺が言うのも変だが、最近の帝国海軍は変わってきていた。

今までは戦艦を主力と考える大艦巨砲主義がまかり通っていたが、真珠湾以降それに替わり航空母艦が海戦の主役となり、航空主兵が海軍の主流に取って代わっていた。

そればかりではない、これまで見向きもされなかった輸送船の護衛の為の海上護衛総隊まで創隊され、こうして我々が最新鋭駆逐艦に乗り、護衛空母までも与えられ実際に護衛任務に就いているのである。

こんな事など、つい半年前にはまったく考えられなかったし、考える者もいなかった。

やはり、帝国海軍は変わりつつあるのだと小倉大尉と話しながら感じている俺がそこに居た。

「おぉっと、こんな時間か、それじゃ俺は穴蔵に戻るとするよ。」

そう言うと小倉大尉は俺に短く敬礼をして、艦橋から出て行った。

俺は彼を見送った後、戦闘指揮所へ行き電測長の大倉上曹に様子を聞いた。

「お疲れさまです。周りは至って静かで、先ほどの戦闘が嘘のようであります。」

大倉上曹はそう答えると、暗い室内で明るく輝く捜索電探の表示画面に目を落とした。

そこには十隻の輸送船を中心に九隻の護衛艦隊が、その周りをがっちりと輪形陣を組み進む、光り輝く光点が南方へと移動しているのが見えた。

すると次の瞬間、画面が真っ暗になり何も見えなくなった。

そして瞬きする間に、先ほどとは違う光の輪が画面一面に広がって行った。

「逆探にも何も映りませんし、我が艦隊の電探だけがこの海域を派手に照らしております。」

「我が軍の情報が正しければ、敵軍はまだ電探を実用化していないらしいからな。」

ついこの前まで、帝国海軍には自ら電波を出す事など闇夜の提灯といって、あざけり笑っていたのである。

その帝国海軍が今や電探や音波探信儀を駆使し、これなくしては

先ほどのような一方的な戦闘を行う事など、かなわなかったのだからと俺は時代の変化を感じずにはいられなかった。

その後、我が艦隊は敵潜を警戒しつつもそれに出会う事なく航海を続け、太平洋における帝国海軍の一大根拠地であり、帝国の各種艦艇がひしめくトラック諸島へと着いたのである。

トラック環礁

トラック環礁は直径六十四ｋｍ、周囲二百ｋｍという世界最大の珊瑚礁に囲まれた天然の要害であり、そこへの大型艦艇の入り口は三カ所しかなく、守るに易い要衝でもあったのだ。

それにしても暑かった。

さすが赤道に近いだけはある。

出航して四日目になって半袖半ズボンの防暑服に着替えたが、暑くてたまらなかった。

五月四日の昼過ぎに我が艦隊と高速輸送船団は、トラック環礁に着き南側の広い水道へ向かい、先に輸送船団から環礁内部へ入って行き、続いて摩周が入り次に我が艦の番が来た。

「水道通る、航海保安配置につけ！」

航海長が艦内電話で全艦に号令を発すると、手空き乗組員が上甲板に駆け出して防舷物や竹竿を用意しはじめた。

「間もなく珊瑚礁を通過する、全員警戒せよ！」

俺も艦橋から身を乗り出す様にして、キレイに透き通って鮮明に見える海中の珊瑚に目をやった。

どうやら満潮のようで、海面に出ている珊瑚は見当たらず、安全に通れそうだった。

「両舷前進原速、宜候！」

この時ばかりは艦長の戸高少佐が直接、操艦をしていた。

そして無事に水道を抜けると、そこは珊瑚礁と思えない程広大な内海が広がっていて、右手前方に秋島が見えて来た。

我が艦隊は秋島と冬島の間を抜けて夏島へ向かった。

夏島には艦艇補給用の重油タンク群があり、各艦に給油をする為に向かったのだが、着いてみるとその変わり様に驚いた。

俺は過去にも夏島に寄港した事があったが、タンク群のすぐ手前にある一万t桟橋に、どでかいクレーンやらドックが建設されていたのだ。

またタンク群も新たな建設が始まっている様で、見たことも無い建設機械と思われる車輌がうごめきあっていたのである。

「香月大尉、あれは一体なんですかねぇ。」

手空きの佐竹大尉が俺の横に来て聞いて来た。

「よう判らんが、新型の建設機械か何かだろう。」

「あぁ、あれですか。あれは土を掘る排土工作車であります。」

いつの間にか横に安藤特務少尉が立っていて、俺達の疑問に答えてくれた。

「ずいぶん詳しいんですねぇ。」

「はぁ、自分が前の艦にいた時にラバウルで見かけたので、憶えていました。」

彼は俺よりも遥かに海軍歴が長く、我が艦の生き字引みたいな存在であった。

「あれがあるという事は、ここもじきに要塞化されますよ。」

トラックを要塞にするだと！

まさか米軍がここまで攻めて来ると帝国は本気で考えているというのか？

トラックは確かに帝国にとって重要な基地であった。

と同時に絶対失ってはならない拠点なのだ。

だからこその要塞化であったのだろう。

俺達はそう理解し、建設作業を見守っていた。

すると、頭上を新型機の烈風の編隊が爆音を轟かせいくつも南の空へと、向かって行った。

多分ラバウルへ向かう部隊だろうと、見当を付けていると

「あれは、土浦航空隊の所属機であります。あそこは確か練習航空

隊のはずなんですが…。帝国海軍はラバウルを決戦の地として、航空戦力を集中しているらしいと噂に聞いとります。」

そう言って来たのは、我が分隊の射手である國本先任曹長であった。

彼は海軍航空隊にやけに詳しく、ある日その理由を聞くと海軍へは航空隊を希望して志願したのだったが、あえなく落第しやむなく砲術に進んだという異色の経歴の持ち主だったのだ。

しばらくして給油も終わり、我が艦隊は高速輸送船団と合流し慌ただしくトラック諸島を後にして、目的地のラバウルへと航行を始めた。

ここからは敵機動部隊の行動圏内となるので、さらなる警戒が必要であった。

護衛空母の摩周からは敵潜警戒の為、盛んに零戦が発艦しては船団の遥か前方へと飛び立って行く。

「それにしても、摩周の艦載機が零戦ばかりというのもおかしな話だよなぁ。普通なら哨戒機といったら九七艦攻あたりがするもんだろう、國本曹長？」

「はぁ、自分も疑問に感じとりましたが聞くところによると、電探の装備化で対空警戒の心配がなくなり潜水艦の捜索に専念できる事と、何より戦闘機であれば敵機を難なく撃破できるという事が一番らしいのでありますが。」

「だが一人乗りの場合、航法の問題があろうて、艦攻だと一人が航

法に係りきりになれるが、戦闘機の場合そうもいかんだろう。」

「それも、捜索電探が解決したそうでして、探知距離の三百ｋｍ以遠へは飛ばさず無線電話で母艦から誘導するそうです。」

俺と國本曹長の会話をまわりの者達は、なるほどという顔をして聴いていた。

すると、通信員の藤一曹が叫んだ！

「艦長！旗艦摩周より入電！艦載機が敵潜水艦を発見、方位左二十度、距離三〇〇、松と竹はこれを迎撃せよ！」

緊急ブザーが艦内に鳴り響く！

「総員！戦闘配置につけ！」

「両舷前進第三戦速！取舵！」

艦内はそれまでの南国気分から一気に現実に引き戻され、本来の戦闘艦の様相を取り戻し、俺達も慌ててそれぞれの配置へと駆け出していた。

我が艦松と竹は、速五十ｋｍ弱の速度で南東へ進撃を続け、三十分ほどで哨戒中の零戦が見えて来た。

零戦の方も我が艦を認めたらしく、ある一点を中心にぐるぐると旋回しており、時たま急降下をして敵潜が潜むと思われる海面を示していた。

「摩周艦載機から入電！我、Ｔ型と思われる敵潜水艦に攻撃するも、命中せざる模様なり。貴艦の奮闘を祈る。以上！」

「上空の零戦に返電。我、必ずや敵潜を撃破す。とな。」

艦長から言われた藤一曹は無線電話を通じて摩周機に伝えると、翼を大きく振りそれに答えた。

「合戦準備昼戦に備え！爆雷戦用意！」

「水測員、水中探信儀打て！」

佐竹大尉の号令に大友一曹が答える。

「水中探信儀、打ちまーす！」

我が艦から独特の探信音が放たれ、かなり近いところから反射音が返って来た。

「敵潜、竹の左九十度、距離二〇、深度七十！」

「竹に打電！貴艦が攻撃せよ。」

艦長は竹に獲物を譲るつもりのようであった。

確かに位置的には竹の方が近く、素早い攻撃が行えるのだが理由はそれだけはなかった。

我が艦はすでに先日、駆逐隊で敵潜撃破一番乗りをしており、僚艦にも手柄を挙げさせようという腹積もりだったのだ。

トップで配置に就いていた射手の國本先任が、悔しそうにその姿を見つめる俺を慰めるかのように呟いた。

「仕方あるまい、我が艦ばかりがいい思いをする訳にもいかんだろう。」

俺は彼に言われて悔しいという思いから解き放たれ、敵潜を葬る事さえできれば我が軍の被害が減り結果、帝国の勝利に繋がるのだという一段上の見方ができる様になった気がした。

艦長はその様な考えから、あえて竹に命令を下したのではと思うと、戸高少佐の事を誇らしく思えてきたのだった。

ドッドッドッ！シュルルーッ―！

竹から二式爆雷が発射された！

間もなくして、前方の海面に爆雷が落ちて無数の小さな水柱が立ち、しばらくして海面が白い泡となって盛り上がり鈍い爆発音が響いて来た。

「おぉーッ！やりましたね！」

國本先任が満面の笑みを浮かべ俺の方を向いたので、大きく頷いてそれに答えた。

その後、双眼鏡で海面を見ると樽やら木箱などの浮遊物が浮かんできて、黒い重油も広がっていた。

「やったな、あれなら探信儀を使うまでも無いわなぁ。」

すると、艦長らは戦闘指揮所へ入っているのか艦橋はガランとしていたので、俺も指揮所へ入ると駆逐艦竹が確認の為、探信儀を打ったのが聞こえて来た。

ピィーン！

…、カァーン

「敵潜の深度、二百mを超えています。」

水測員の大友一曹が静かに報告した。

その後、敵潜は圧壊音と共に深海へと沈んで行き迎撃戦闘は終了し、我が艦と竹は輸送船団へ合流したのだった。

それからのラバウルへの道のりは、意外にも何事も起らず遥か彼方には東西に細長い、ニューアイルランド島が見えて来た。

この島にはカビエンという海軍基地が在り、ラバウルの後方基地として最近、飛行場が大幅に拡張されたらしいと、かの國本曹長が話してくれた。

我が船団はニューアイルランド島の幅一ｋｍ程の水路を抜ける為、一旦船団を解きまず我が第五十一駆逐隊から、一列縦隊となって水路に入って行き無事に抜けると、護衛空母摩周を先頭に輸送船がこれまた一列縦隊になり、水路を通り抜けた。

こうして全艦は再度船団を組み、ニューブリテン島を目指して出

発したのである。

この海域一帯は我が帝国軍の完全な支配下にあり、昼間は安心して航行ができた。

緊迫のラバウル

五月六日、ようやく我が船団はニューブリテン島を遠望する位置までたどり着き、艦橋では安堵する声も聞かれたが

「諸君！ラバウルに入港するまでは気を緩めるではないぞ！」

と艦長から叱責され、皆気を引き締めたのだった。

「艦橋！こちら戦闘指揮所。右四十度より大型機一、接近、距離二〇〇！」

「大型機だと！摩周に打電、我の電探に大型機の感あり、至急確認されたし。」

艦長は通信員に命じた。

「多分、味方の哨戒機でしょう。」

佐竹大尉が何の気なしにぽつりと言ってから周りを見渡し、皆の表情が凍り付くのを見て慌てて付け加えた。

「もし敵機であれば摩周の零戦が、一撃で叩き落としてくれましょうぞ！」

そんな彼を何故か艦長は叱る事なく、笑みまで浮かべ眺めていたのだ。

確かに今は戦時であり、一時でも気を赦せばその後には死が待っ

ており、その緊張感がいつの間にか神経を蝕んでいった。

そういう時に佐竹大尉の様な楽観論者というか、その場の空気を和ます者は無くてはならない存在なのである。

我が艦の戸高艦長は、その辺の事をわきまえている懐の深さがあり、俺はこの艦が今までにない雰囲気を持つ艦である事に親近感を感じ始めていた。

その日の夕方に、輸送船団はラバウルに入港した。

すると直ちに、第五十一護衛艦隊の司令部と各艦長らが第四艦隊司令部へ招集され、再度出港の準備をするよう命令されたのである。

戸高艦長は慌ただしく内火艇に乗り、松を後にしてラバウルに進出して来た司令部へと向かった。

その間に我々は、急いで燃料や食糧の補給をして出航の用意を整え、艦長の帰りを待っていると内火艇が戻って来て、浮かぬ顔をした艦長が舷門を上がって来るではないか。

「お疲れ様でした、どうかされましたか？」

俺は思案顔の艦長に恐る恐る声をかけた。

「香月大尉、エライ事になったよ！艦橋に将校集合をかけてくれ。」

俺はすぐに舷門に居た当直下士官に機関部の安藤特務少尉を呼んで来るよう命じ、只ならぬ艦長の後を追った。

艦長が俺を名前と階級で呼ぶのは乗艦以来の事であり、嫌な予感を感じずにはいられなかった。

「安藤少尉以外は皆、艦橋で艦長をお待ちしております。」

「そうか、手回しがいいな。」

速足で艦橋へ上がると艦長は海図台に駆け寄り、ソロモン海から珊瑚海一帯の海図を広げ、険しい顔付きで睨みはじめたのだ。

間もなくして安藤少尉が艦橋に駆け込んで来た。

「諸君！心して聞いてもらいたい。我が護衛艦隊はこれより、ＭＯ機動部隊へ燃料補給に向かう油槽船の護衛任務を仰せつかった。今朝方より、珊瑚海には有力な敵機動部隊が行動しており、発見されれば大規模な空襲は免れんが、第四艦隊司令部は我が艦隊の高い防空能力を買って、あえて危険な任務を我々に託したのである。諸君らは、その能力を遺憾なく発揮してもらいたい！以上！直ちに出航準備にかかれッ！」

「はッ！」

俺達は素早く敬礼をして、それぞれの持場へと駆け出した。

いやはや大変な事になってきた。

今の今までたかが戦線後方の護衛任務などと、南国気分で居たのがいきなりおお戦さの、ど真ん中に放り込まれるのである。

しかし、帝国軍人であるからには表舞台で敵の主力部隊と渡り合

ってこそ本望なのであり、武人の誉なのだ！

たとえ我が機動部隊への補給任務でも、今次海戦において帝国海軍主力の一翼を担うのには変わりなく、俺は生まれて初めて武者震いというものをしていた。

なんせ大東亜戦争開戦以来、俺は数々の大勝利をもたらした海戦に何ひとつ参加していなかったのだから。

「総員に告ぐ、こちらは艦長である。これより本艦は珊瑚海へと出撃する！」

「各員は己の職責を全うし、奮励努力せよ！以上。」

「分隊長！ようやく我が艦にも、桧舞台で活躍する場が用意されましたね！」

「おぅさ！こんなお役は滅多に廻って来んからなぁ、ここはひとつ気を引き締めて掛らねばならんぞ！」

俺と國本先任は、トップに上がりお互いに震い立つ気持をぶつけ合った。

間もなくして駆逐艦松を先頭に、第五十一護衛艦隊全九隻と重油を満載した高速油槽船二隻は、錨を揚げて次々とラバウル港を出航し、我が機動部隊の待つ珊瑚海へと進撃を開始したのである。

俺は射撃訓練を終えて艦橋へ降り、艦長から今現在の戦況について聞いてみた。

すると帝国海軍は、ニューギニア島の南東岸にあるポートモレスビーを攻略する為、MO機動部隊に高木武雄少将を司令として、第五航空戦隊の正規空母翔鶴、瑞鶴をはじめ重巡二、駆逐艦六を宛て、MO攻略部隊としては軽空母祥鳳の他重巡四、軽巡一、駆逐艦六、輸送船六をもって作戦を発動したとの事であった。

この我が軍の動きに対し、米軍は正規空母二隻から成る有力な部隊を派遣して来たらしいのだ。

この事は帝国軍も予め予想しており、その為に第五航空戦隊をわざわざこの作戦に、宛てていたのである。

緊迫のラバウル（後書き）

御意見、御感想をお待ちしております。

激闘の珊瑚海

昭和十七年五月六日、我が帝国で後に珊瑚海海戦と呼ばれた闘いが始まった。

この日の夕方、我が第五十一護衛艦隊は旗艦摩周と油槽船二隻を中心に輪形陣を組み、主力であるＭＯ機動部隊への燃料補給の為、第一戦速（三七ｋｍ）でソロモン海を南下して行ったのである。

俺はこの時、この闘いが世界初の空母同士の対決だった事など、まったく知らずにこの海戦に参加していたのだ。

「水測員！ためらわずに探信儀を使え！この海域に味方潜水艦は一隻も居らんと、司令部には確認済みだからなッ！」

水雷長の佐竹大尉が威勢の良い調子で、部下に命じた。

それまでの張り詰めた艦橋の雰囲気が一気にほぐれ、普段の訓練時の様な気分になれたのは、やはり彼の為せる技であったのだろう。

それでも航海長の大谷大尉は海図台で艦位を真剣に記入していて、予想されるＭＯ機動部隊との会合点への針路の確認に余念がなかった。

その横で艦長の戸高少佐が通信員の藤一曹から、一通の電文受け取り艦内電話を取り上げた。

「各員に告ぐ、こちらは艦長である。これより第四艦隊司令長官、井上中将より督電が入り読み上げる。作業中のまま心して拝聴する

様に！

帝国の興廃はかかってこの闘いに有り、各員が責務を全うし、全力をもって任務に当たられん事を切に願う！以上！」

司令部からの情報によると、敵機動部隊はガダルカナル島の南方五百ｋｍを西北西に針路を取って北上中との事であり、我が機動部隊はそれと平行する様に真北四百ｋｍを航行しており、明日の早朝には攻撃を開始するものと予想された。

我が艦隊は、先に出航していたＭＯ攻略部隊の後を追いかける様に一路ソロモン海を南下し、七日の暁にはこれに追いついて抜かしてしまい、我が艦隊のすぐ後ろから攻略部隊が付いて来るのだ。

俺は航海長の大谷大尉の横に行き、艦長に聞こえないよう聴いてみた。

「大谷大尉、航路は間違ってないのか？これじゃ、我々が攻略部隊と思われるぞ。」

「いえ、間違いありません、昨夜から何度も確認してますんで。何か様子が変なんですよ、戸高艦長の…。」

そう言われてみると、艦長は夜が明けてから時計と空を交互に睨み、どこか落ち着きが無い様なのだ。

「艦橋！こちら戦闘指揮所！南西六十度より大型機接近！距離三〇〇！」

「総員、戦闘配置！直ちに旗艦に報告！」

艦長に言われて、通信員の藤一曹が旗艦に無線電話を入れると、

「旗艦より入電！我の命あるまで発砲を禁ず！以上！」

発砲を禁ず？

どういう事であろうか。

まさか、わざと発見されるというのか！

俺はどーも俯に落ちないところがあった。

先ほどの攻略部隊を載せたはずの輸送船は、喫水が浅くとても積み荷を満載してる様には見えず、そして今の命令である。

もしやして、我が艦隊が敵の航空攻撃を一手に引き受ける算段なのであろうか！

俺は腹を決め、艦橋に居る他の者には気づかれない様に戸高艦長に聴いてみた。

「艦長、まさかとは思いますが我が艦隊は囮なのではありませんか？」

「香月大尉、我々は軍人なのだよ。」

とぽつりと答え、前を見据えていた。

やはりそうなのだ！

確かに攻略部隊の対空火力は、我々のに比べ一昔前の装備であり、二式射撃管制盤を備えた我が艦隊の対空射撃能力は、帝国海軍一であるに違いなかった。

であれば、これを使わぬ手はないのである。

俺自身も我が艦の力がどの程度のものか、試して見たかったという事もあったが問題は敵機の数であった。

敵機動部隊は二隻の正規空母を繰り出して来ており、その艦載機は百四十機程度と予測されていて、少なくとも攻撃隊は百機を超えると考えられていた。

しかし、我が方にも艦載機があったのだ。

そうだったのか！

それで我が護衛空母摩周の艦載機が、零戦ばかりであったのかと今、納得したのである。

という事は、はなから帝国海軍は我々を囮として編成したのであり、であればその頃にはこの海戦が生起すると解っている事になり、そんな先の事など神でもなければ知り得るはずもなく、こればっかりは俺の考え過ぎかと思い直したのであった。

「敵機ッ！右八十度！機数一、大型機！高度三千！」

艦橋の見張り員が叫び声を上げ、皆その方向を一斉に見た。

「艦橋！こちら戦闘指揮所！敵機との距離二〇！」

敵機はカタリナらしく、それに向かって摩周艦載機の零戦が一直線に立ち向かって行く！

「敵機から長文の無電が打たれています！」

通信員の藤一曹が報告した。

それを確認した様に零戦がカタリナに襲いかかり、敵機がガクンと機首を落とし、墜落し始めた。

「帝国万歳！」

その様子を見ていた乗組員達が凱歌を挙げた。

しかし、闘いはこれからであり我が艦隊の真価が問われる、その日の過酷な対空戦闘が幕を開けたのである。

その朝、八時過ぎに戦闘指揮所から悲鳴に近い報告が来たのだ。

「航空機多数！左五十度より接近中、大編隊なり！距離三〇〇！」

いよいよ始まった。

我が艦隊は風上へ舵を切ると旗艦摩周から、次々と艦載機の零戦が飛び立ち上空で三十機あまりの編隊を組み、敵の来る東の空へと向かって行った。

「艦橋、こちら戦闘指揮所。北百八十度より大編隊接近中！距離三〇〇！」

「おぉ！来たか！それはラバウル航空隊の烈風の編隊であろう！」

それまで曇りがちな表情だった艦長から、ようやく明るい声が聞かれた。

それにしても絶妙な間合いである。

後三十分遅れていたら、敵機の攻撃が終わってから到着するという、なんとも間の抜けた援軍になるところだったのだ。

間もなくして、電測長の大倉上曹が電探に映る我が零戦隊と、敵編隊の模様を報告してきた。

「摩周艦載機、敵編隊まで距離一〇。敵編隊が二つに別れました！摩周機と敵編隊、交戦を開始したようです！別の編隊が我が艦隊に接近してきます！左六十度、距離五〇！」

「合戦準備！対空戦に備え！」

戸高艦長が大声で号令を発し、俺はトップへと走った。

「左対空戦、左六十度、敵編隊雷撃機から狙え！」

俺は艦内電話で命じて、双眼鏡に飛び付いた。

雷撃機から狙うのはこれが高度を下げて来る為、他の艦が狙いずらくなるからだった。

「砲術長！敵機発見！左六十度、六十機、高度四千、距離二〇！」

やはり我が艦一、いい目の持ち主である三m測距儀員の伊藤二曹が一等最初に、敵編隊を見つけ出し報告してきた。

伝声管を通じて艦長の命令が復唱されて来た。

「うちーかた、はじめーッ！」

軍艦は艦長の命令があってはじめて発砲ができるのであり、艦隊は司令官が命じて攻撃が開始されるのだ。

「距離一八・〇五！」

伊藤二曹が叫んだ！

俺が双眼鏡で敵機を捉えると、それは雷撃機と爆撃機の編隊に別れ、高度を下げつつある雷撃編隊は更に左右の部隊へと分離し、我が艦隊を挟撃する態勢を取ろうと、機動して行った。

「左の編隊を狙え！」

國本先任がすーッと射撃盤を左の雷撃機に向けると、前後の砲塔が敵機に狙いを付けた。

「一番準備良し！」

「二番準備良し！」

「撃ち方はじめッ！」

対空戦闘

「てェーッ！」

國本曹長が怒鳴りながら引金を弾くと、一番、二番砲塔の十糎連装砲が勢い良く火を噴きはじめた。

ドドン―

一斉射分の遅延信管付きの十糎砲弾四発が、敵雷撃編隊へと秒速九百ｍで放たれると、僚艦の竹と桑もほぼ同時に発砲を始めたのである。

すると敵機の手前に真黒い弾幕が四つ現れ、他の艦の弾幕もそれに続くと十六機程の敵編隊に乱れが生じ、その内の何機かがたまらずに機首を上げた。

「遠二！　急げ！」

手前で炸裂した弾幕を見て、とっさに出した俺の近弾修正号令で我が艦砲が一斉に速射を始めると、僚艦も同時に連射を始めたのである。

今度は敵編隊の周りで、無数の我が砲弾が炸裂し出したではないか！

途端に数機のＴＢＤが、火を吹き海面へ堕ちて行った！

その後の二十秒間の射撃で我が艦だけで八十発、他二隻の僚艦か

ら百六十発、計二百四十発の砲弾が迫り来るデバステイター編隊へ叩き込まれたのである。

この時点で、我が艦隊へ更に突進を続けて来る敵機はまだ十機程あり、降り注ぐ弾幕をものともしない米兵の攻撃精神の旺盛さに、俺は驚きを覚える共に闘志が湧いてきた。

ここで奴らを殺らねば、こちらが必殺の航空魚雷を喰うのだから！

最初の二十秒間の射撃で、我が長十糎砲弾は落下式弾倉に用意しておいた即応弾を使い果たし、人力による給弾で二秒に一発を射撃する低速射撃となってしまって、敵機への砲弾投射量が減った反面、接近して来た雷撃機への照準が正確になってきており、十ｋｍにまで近づいた敵機には恐怖の弾幕と成りつつあった。

「更に！急げ！」

俺はあまりの命中率の悪さについつい力が入り、あらぬ号令を掛けてしまった。

各砲塔では、砲員達が精一杯の給弾を行っていたのであり、彼らも自分達の努力が自ら艦を救う事になるという結果を知っていたのにである。

すると、それらの念か通じたのか立て続けにＴＢＤデバステイターが火を吹き、次々と墜落して行ったのだ！

残った敵雷撃機はその様子に、たまらず航空魚雷を投下し回避しだしたのであった！

「よし！撃ち方待て！次はッ！」

俺は右へと別れた敵雷撃機を探したが、我が艦の迎撃射界から外れていた為、上空から接近している急降下爆撃機へ視線をやった。

すると敵機は二つの編隊に別れ左十度、距離五千m、高度五千m辺りから今、まさに急降下を開始せんとしているではないか！

「電探射撃ッ！左十度、左爆撃機編隊、撃ち方はじめッ！」

俺の号令で前後の高角砲が砲身を上げ、敵急降下爆撃機へと照準を付けた！

「トップ、こちら戦闘指揮所。目標捕捉ッ！準備よしッ！」

「てェーッ！」

ドドンッ―

五秒後、降下をはじめた敵艦爆編隊のやや右側に四つの弾幕が花開いた。

「左よせ二！急げェーッ！」

するとＳＢＤ編隊が乱れ、あらぬ方向へと機首を翻したのだ。

と次の瞬間ッ！敵艦爆へ突っ込んで行く我が戦闘機、烈風の姿が飛び込んで来た！

ドンドンッ―

「撃ち方待て！」

一瞬の間に、二斉射程の我が砲弾が放たれてしまったのである。

「南無さん！」

そう叫んだところへ、先ほどまで敵機の居た空間に運悪く、烈風数機が突入して行った！

パッパッパッ―

俺は思わず目をつぶった。

「砲術長ーッ！味方機が！」

國本先任の悲痛な叫び声で目を見開き、弾幕に視線を送ると一機の烈風が黒煙を吹き、ガクンと機首を下げ降下しはじめたのだ。

なんたる事かッ！

よりによって味方を撃つとは！

その堕ちて行く戦闘機に、一機の烈風が寄り添う様にしているのが見えたので、俺は双眼鏡にしがみ付き慌てて覗いて見た。

すると、被弾した機の搭乗員が盛んに手を振っているではないか！

その機は発動機が今にも止まりそうであったが、なんとか機首を上げはじめた。

それに近づくもう一機の烈風の搭乗員は隊長らしく、下を指差し盛んに何かを叫んでいる様だ。

どうやら無線機がやられ、手信号でやり取りしているらしい。

あの様子では、恐らくラバウルまで行き着く前に墜落してしまうのは間違いなく、俺が痛烈に責任を感じはじめていると、途端に我が艦が回頭をはじめ、風上の北に向かい速力を上げ出した。

俺はもしやと思い、旗艦の摩周を見ると飛行甲板上になにやら網が張られているではないか。

あれは確か、艦載機の着艦失敗時に海中への転落を防止する防護網だったはずだが？

なるほど！

あの機を収容しようというのだ！

しかし、未だ敵艦載機の攻撃が続いており、っと上空を見上げて視るとそこには敵の姿は無く、いつの間にか我が戦闘機隊により敵機はことごとく、駆逐されていたのだった。

「トップ、こちら戦闘指揮所。左九十度より敵編隊接近中！距離二〇〇」

真西から敵機だと！

多分、ポートモレスビーからの大型機であろうか。

それにしてもまだ距離があるから烈風が着艦するまでは心配はいらないであろうし、他の烈風がいるではないか。

烈風が着艦すべく高度を下げ、摩周の後方から近づいて来た。

俺は身を切る思いでその様子を見つめていると、見張員が報告してきた。

「右百二十度より、編隊！摩周の零戦隊と思われます！」

我が艦から見て丁度、摩周の向こう側の高度五千m辺りを、編隊を組んで帰って来るのが見えてきた。

だが、出撃した時よりもかなり数が減っていたのは遠目で見てもすぐに解ったのだ。

彼らの中には空中戦がこれが初めてという、ヒヨッ子搭乗員も多いと國本先任から聴き及んでいたが、恐らくは敵艦戦と激しく渡り合い喰われてしまったのであろう。

双眼鏡で我が艦載機編隊を視ている間に先ほどの烈風が着艦態勢に入り、摩周の艦尾から近づき車輪が着いた次の瞬間、プロペラが止まり網に突っ込んで機体が停まった。

「上手くいきましたね！砲術長！」

「あぁ、本当に良かったなぁ。」

俺は心の底から熱いものが込み上げ、泣きたくなるほど嬉しかっ

た。

味方の砲弾で友軍機を撃墜したうえ、搭乗員まで死なせたとなれば一生後悔して往かねばならぬと思ったからだった。

間もなくして烈風は、損傷が激しい為か飛行甲板から海中に投棄され空中で旋回していた零戦隊が次々と着艦を始めた。

「戦闘指揮所、こちらトップ。西方の敵編隊の距離知らせい。」

「こちら戦闘指揮所。敵編隊との距離五〇、只今ラバウル航空隊が檄撃中成り！」

敵艦載機をあっという間に蹴散らした、あの烈風隊が迎撃しているのであれば安心して良かろうと思っていると、あろう事か彼らが撃墜に手こずっているというのだ。

「それは敵艦載機を追い回している内に、二十ｍｍ機銃弾を使い果たのでありましょう。残った十二・七ｍｍ機銃ではなかなか撃破が難しいのではないでしょうか。相手が重爆のＢ‐１７であれば。」

と國本先任が横で丁寧に解説してくれた。

しばらくすると西の高空にＢ‐１７と思われる編隊が接近して来るのが遠望され、双眼鏡を覗いて視ると確かに烈風が盛んに攻撃を仕掛けているが、烈風の両翼からは発砲炎は見えず機首からか細い機銃弾を射撃しているのが見え、爆撃機からは一向に火も吹かず煙も吐かなかったのだ。

やはり國本先任の言う通り、空飛ぶ要塞Ｂ‐１７フライングフォ

ートレスはその名にふさわしい防御力持つ、爆撃機であった。

「トップ、こちら戦闘指揮所。摩周より入電、命令有るまで発砲を禁ず。以上！」

当たり前である！

たった今、誤射をしたばかりであったのだから。

「測距儀、まだ距離は測れんか？」

「はい、もう少し近づいてくれませんとダメであります。」

伊藤二曹が自慢の裸眼の持ち主でも、三ｍ測距儀は二十ｋｍを切らねば距離を測る事が出来ず、歯ぎしりしながら答えた。

すると、敵爆撃機を反復攻撃していた四十機のラバウル航空隊が潮が退く様に、敵編隊から離れて行くではないか。

それを見たＢ－１７は我が艦隊への爆撃の為、それまでの密集態形から散開し始めた。

「それでもラバ空の連中は良くやってくれましたよ。なんせ当初五十機と言われていた編隊が、あの様子ですと三十機そこそこですから。」

海軍では約何機という言い方はしないのである。

何故ならば約三十機は百三十機と聞き間違えてしまうからだ。

また、敵などの方位を示す時も時計の時刻に置き換えて何時の方向という表現はせず、正面を零度として角度で表すのである。

よく新兵などが間違った言い方をするので俺はたしなめたものだった。

ともあれB‐17の敵編隊は我が戦闘機の妨害がなくなった事をいい事に、爆撃態形を整え悠然と我が艦隊に向かって来たのだ。

「敵編隊との距離一九・九〇！」

「電探射撃戦用意！右九十度、敵爆撃機編隊！」

「捕捉電探準備よし！」

「トップ、こちら艦橋。撃ち方はじめ！」

旗艦摩周より発砲許可命令が来たのだ！

「撃ち方はじめ！」

「てェーッ！」

射程いっぱいの距離から俺の号令で國本先任が声を発すると共に、前後の長十糎高角砲が一斉射分の発砲をした。

ドドン―

敵編隊との距離がある為、着弾まで二十数秒間かかりその間にも敵機は我が艦隊にジリジリと接近して来ていた。

「弾着、今！」

計時員の報告と共にブザーが鳴り、同時に敵爆撃機編隊の手前で黒い弾幕が四つ炸裂した。

「遠三！急げッ！」

俺は直ちに修正値を命じ連射を開始させた。

我が艦より若干遅れて僚艦からも発砲が開始され、敵編隊の周りにパラパラと弾幕が現れ出した。

駆逐艦松の一番、二番砲塔は先ほどから盛んに耳をつんざく発砲を繰り返しており、間もなくして敵爆撃機の先頭を行く編隊の辺りに連続して弾幕が現れ、有効弾を送り出しはじめていた。

「ヨーソロー！そのまま急げーッ！」

つい口を次いで俺は叫んでしまう。

すると敵編隊が黒煙で隠れてしまうほどの、弾幕が発生しはじめた。

我が第五十一艦隊、九隻の十糎高角砲三十六門の砲弾が毎秒一発の速度で、空飛ぶ要塞に襲いかかり出したのである！

旗艦被弾！

その弾幕は確実に敵爆撃編隊を捕らえていた。

何故ならＢ‐１７は先ほどの艦載機と違い、水平爆撃を行う為高度三千ｍ辺りを機動もせずに真っ直ぐ我が艦隊向かって来たのだ。

これは我が二式電探射撃管制盤が最も得意とする対空進入経路であり、たった十秒間で三百六十発もの効力のある十糎砲弾を敵編隊へと浴びせかけ、瞬く間に三機のＢ‐１７を爆砕していた。

それを見た敵爆撃機はワナワナと編隊を震えさせ明らかに怯え出しはじめた次の瞬間、敵編隊は算を乱して我先に回避行動を採り散開していったのだ。

「バンザイ～！バンザイ～！」

「撃ち方、待て！」

艦内のあちこちから凱歌が挙がっていた。

しかし、十機程の編隊が我が軍の弾幕をものともせずに向かって来るではないか！

「右九十度！爆撃機編隊！撃ち方はじめ！」

「てェーッ！」

電測長の大倉上曹は以心伝心で残った敵機にすかさず照準を付け

ており、間髪を入れずに発砲する事が出来たのである。

ドンドンドン―

それまで耳をつんざく様な発砲音が、今では小気味良いリズムを奏でる太鼓の様に聞こえて来ていた。

「敵機！爆弾倉を開けました！」

測距儀員の伊藤二曹が悲痛な声で叫んでいたのだ。

今頃になってようやく、敵爆撃機に弾幕が覆いはじめていた。

「急げ！」

俺はすぐに連続射撃を命じたが、その間にも敵編隊は爆撃進路を取りつつ、遂に爆弾を放ちはじめた。

次の瞬間、十糎砲弾が敵機を捕らえ次々と命中し、爆散していったが時すでに遅しであったのだ。

敵爆撃機からは爆弾が全て放たれ、我が艦隊に向かって降り注いで来たのである。

それを見極めて我が艦は、取り舵を採り左へと急回頭をしはじめた。

「先任！我が艦はなんとか、かわせるな。」

「ですが砲術長！あれを！」

その声で俺は慌てて後ろを振り返った！

なんと、旗艦摩周が右に回頭しているではないか！

俺は百個余りの、二百五十ｋｇと思われる爆弾が迫り来る大空を再び顧みて、その落下経路を目で追い摩周がそれから逃れるよう天に祈った。

刹那！

爆弾が海面で炸裂し始め無数の水柱が上がり、水煙で摩周や他の艦も見えなくなった、次の瞬間！

水煙の向こう側の明らかに海面より上で、爆発が起こったのが見えたのだ。

二、三秒程して金属がぶつかり合う爆発音が聞こえ水煙が収まった海上には黒煙を吐く、旗艦摩周の姿があったのである。

「クッソーッ！やられたかッ！」

「撃ち方辞め！」

艦長から射撃中止の命令が下ると同時に俺は撃ち方辞めの号令をかけ、辺りに敵機の居ない事を確認して艦橋へ駈け降りた。

「摩周被弾、通信途絶により我が艦が艦隊の指揮を採る！全艦、摩周を中心に輪形陣を作れ、各艦は被害状況知らせ。」

「駆逐艦竹、梅、桃より入電。我に被害無し。第五十二駆逐隊より入電。我が隊はいつでも戦闘可能成り。以上！」

「電測長、こちら艦長。周辺空域の状況知らせ。」

「半径三百ｋｍ以内に、接近する航空機無し！」

艦橋は慌ただしく各艦とのやり取りがされており、双眼鏡を覗く佐竹水雷長に話かけた。

「摩周の被害状況は分からんのか？」

「はぁ、それが見る限りでは船足も衰えとりませんし、あ！今、発光信号を発しました！ワレ、ソンガイケイビナリ、サレド、ツウシンニ、シショウアリ、マツガ、カンタイノ、シキヲトレ。以上！」

帝国海軍において独断先行は陸軍と違い厳に戒められており、先ほどの戸高艦長の判断はこれに当たりかねない微妙な問題であったのだ。

しかし、艦長は迷い無く即断し命令を発したのである。

戦闘という異常事態では、最悪の状況下で瞬時に最良の選択をせぬば負けるのであって、それはすなわち自らの死を意味するのだ。

この旗艦被弾という緊急事態において的確な判断を下した、戸高一少佐を俺は信頼に値する上官だと思うと共に、自分の命を預けられる人にやっと出会えたと思ったのである。

海軍軍人は星の数ほど居れど、俺は今まで自分が納得できる様な

上官に恵まれず、これまで数々の艦を渡り歩いて来た。

それが帝国の命運を掛けたこの大東亜戦争において、ようやく長年の念願が叶ったのだ。

「航海長、操艦を任す。通信員、第四艦隊司令部へ打電、我、旗艦に被弾すも作戦続行に支障無し。更に全艦に伝達、我が艦隊は作戦を続行す各艦はその責務を全うせよ。以上！」

戸高艦長は矢継ぎ早に命令を下すと、俺と佐竹水雷長に一緒に戦闘指揮所に来るよう声をかけ艦橋を後にした。

俺達が戦闘指揮所へ入ると艦長は機関科へと連絡し、安藤特務少尉を呼んでいたのだ。

俺にはなんとなく艦長の考えが解りかけてきた。

間もなくして安藤少尉が戦闘指揮所に入って来ると艦長が口を開いた。

「諸君、しばらくの間我が艦が艦隊の指揮を執る事になった。そこでここに仮司令部を設け、各員に艦隊運用を行ってもらう。香月大尉は艦隊防空対艦指揮を、佐竹大尉は艦隊対潜指揮を安藤少尉は機関運用管理をそれぞれ任じる。慣れない事とは思うが艦隊司令部機能の復旧までの間は、我が艦が艦隊の全責任を負うのだ。心して当たってもらいたい！以上カカレ！」

それから俺達は大わらわで艦隊司令部の代行をしたのだが、これがまた結構大変な仕事であったのだ。

まず俺は、電探により近隣の空域に不審な航空機が居ないか大倉電測長に確認し、艦隊直衛役のラバウル航空隊の烈風以外は先ほどの敵爆撃機編隊が、我が艦隊より遠ざかって行くだけである事を聞いて当面の脅威が無い旨を戸高艦長に報告した。

その後、敵機侵入時の各艦の射界を再度それぞれの艦に伝達し、合わせて旗艦摩周の戦闘機隊の状況を機上無線電話で問い合わせさせた。

すると、摩周の状況が搭乗員を通じて明らかとなってきたのである。

摩周は操艦に支障は無く機関、船体共に無事であった。

しかし、唯一被害を受けた所が艦橋の無線室を含む戦闘指揮所であったのだ。

なんたる事か！

たった一発の二百五十ｋｇ爆弾がよりによって艦橋後部に命中し、艦隊指揮の中枢部を破壊したのである。

これはどの艦でも同じ構造である為、どの艦でも起き得る事を示していたのだ。

とにかく、摩周の飛行甲板にはほとんど被害は無く艦載機の運用は可能であったので、直ちに直衛機を上げるよう命令した。

なにせ今、上空に居るラバ空の烈風は先ほどの迎撃戦で弾切れの機がほとんどなのだ。

そうこうしている所へ、旗艦摩周から復旧した艦隊無線電話で被害の詳細を伝えて来た。

それによると通信機能はある程度回復したが、各種電探はまったく使用不能であり、何より司令部要員のほとんどが被弾時戦闘指揮所に詰めて居た為、死傷者が多数出ており、しばらくどころか本作戦中は、我が駆逐艦松が艦隊の指揮を執るよう重傷を負った原司令から正式に命が下されたのである。

いよいよこれは本腰を入れねばと思っていた矢先に、電測長の大倉上曹が北方より編隊が接近中である事を、我々に知らせたのだ。

「全軍突撃せよ！」

「それはラバウルからの直衛機であろう。」

そう艦長が答え、我々一同は納得した。

「艦長！我が機動部隊の攻撃隊と思われる通信を傍受しました！」

今度は、通信員の藤一曹が我々の最も知りたかった情報を報告して来たのである。

「そうか！よし、艦内の全員にも聴かせてやれい。」

俺は、我が艦の艦長はずいぶん粋な計らいをするもんだと想いつつ、全乗組員が藤一曹の声に聴きいった。

「我、敵艦戦の攻撃を受く。」

「我が制空隊、これを撃撃す。」

「我が制空隊、敵艦戦をことごとく撃破せり、攻撃隊に損害無し、我の零戦隊は無敵成り！」

「我、敵艦隊を発見せり。」

スピーカーから流れる我が攻撃隊の模様に、松の乗組員全員が一喜一憂していた。

「全軍突撃体形作れ。」

「翔鶴隊はレキシントンを、瑞鶴隊はヨークタウンを攻撃せよ。」

「全軍突撃！」

遂に、我が第五航空戦隊艦載機による攻撃が始まった！

「隊長機、被弾炎上の為、我が指揮を引き継ぐ！」

どうやら、我が軍にも甚大な被害が及んでいる様である。

「我に被弾機多数あるも、攻撃を続行す！」

我が攻撃隊の突撃風景が、皆の目に浮かんでいた。

「敵母艦レキシントンに魚雷四本、爆弾多数命中せり、ヨークタウンにも魚雷二本、爆弾数発命中す！」

「帝国軍！万歳！万歳！」

隊長機被弾の報に一時は艦内も落ち込んだが、攻撃成功を聴きそれぞれの戦闘部署が沸き立った。

「全軍、集まれ！」

「これより帰投す。」

攻撃開始から、二十分後それは流れた。

「砲術長！やってくれましたね。」

佐竹大尉が満面の笑みで俺に語り掛けて来た。

我が機動部隊の攻撃隊はきっちりと摩周の仇を取ってくれたのである！

しかし、先ほどの様子では五航戦攻撃隊の被害も相当出ているはずであり、二の矢、三の矢を継ぐ事が出来るのかと心配しているところへ、ラバウルから上空にある弾切れの烈風隊に代わり、二直目の艦隊直衛部隊が到着したこの時に俺は、摩周艦載機を着艦させ燃料の補給を行わせるよう艦長に進言し、許可を受け直ちに実行するよう命じた。

今のところ本海戦では我が軍に沈没艦は無く、敵正規空母二隻を行動不能にした事はほぼ間違いはずであり、我が艦隊の士気は天を突く勢いであった。

今のところは…。

「艦長！電探に感あり！左百十度、距離三〇〇、百機以上の大編隊、速度四〇〇、高度五千、針路南東。」

電測長の大倉上曹が報告してきた。

我が艦隊は今、南下を辞め東進しており、我が艦の左百十度はラバウル基地方向であり、その針路から敵機動部隊へ攻撃に向かう味方の航空部隊と思われたが、念のため上空の烈風隊にその旨を伝えると、やはりそれはラバ空からの攻撃隊であると返答があった。

「四艦司令部は、敵艦隊のとどめを刺す気なんでしょう。」

安藤少尉が俺の横で呟いた。

「あぁ、お偉いさん方がこの期を逃すはずはあるまいさ。」

俺は少尉にそう答え、自分自身にも言い聞かせていた。

我が帝国軍では、民主主義国家のもとで自由を謳歌している米兵なんぞは恐れるに足らずなどと、声高に吹聴する軍高官らが多く居たのだが、先ほどの敵機の搭乗員の中には我が弾幕をものともせずに突撃して来る者達もおり、我ら帝国軍人に負けず劣らずの敢闘精神を持ち合わせている事を認めざるを得なかった。

何故、今こんな事を考える様になったかというと帝国を出撃する前、連合艦隊司令部において招かれた晩餐会での席上、とあある少佐が言っていた言葉が気になっていたからだったのだ。

「アメリカという国を決して侮らないで下さい。あの国は帝国の十倍以上の生産力を持ち、惜し気も無く戦線に物資を投入して来るのです。それに比べ、帝国の資源には限りがあるのです。兵員においても同様で、連合軍は帝国の十倍以上の人的資源があり、なおかつ精神力も我々と同等と思って下さい。ですから叩ける時は徹底的に叩き、危うい時はすぐに引く勇気を持って、闘いに当たって下さい。」

俺は最初、こんな事を言う海軍将校をよく連合艦隊司令部が許しているなと思いつつ、山本長官や宇垣参謀長の顔を伺うとなんと彼らもその発言に頷いていたのだ。

帝国軍は、変わりつつあるのだろうか。

つい先日までは、やれ大艦巨砲主義だ、航空主兵だと息巻いていた者達が今では影を潜め、戦争は補給が続かなければ負けなのだと至極当たり前な事を言い出し、海上護衛総隊を創設して最新の艦艇を真っ先に配備させ、かく言う俺もその艦隊に配属され早速最前線へと出撃して来て、我が艦の優秀性を証明していた。

俺は海軍に入り、戦艦などの大艦に乗り組み、敵主力艦隊と一世一代の撃ち合いをしてみたいと望んだ事もあったが、戦争が始まると戦艦などの出る幕は無く、我々の様な駆逐艦や潜水艦が活躍したのである。

この事は取りも直さず戦前に帝国海軍が目指していた、主力艦による艦隊決戦などは開戦以来只の一度も起こらず、航空母艦や基地航空隊の航空機がこの戦争における主役となりつつあるのは、我々からみても明らかであったのだ。

現に本海戦でも戦果を挙げているのは航空部隊であり、それを撃破出来る能力を与えられた我が艦隊だったのである。

そんな事を考えている内に、先ほどのラバウル航空隊の攻撃機が敵艦隊発見の報を打電してきた。

「勝ったな。」

戸高艦長が今、正に攻撃が行われようとしているはずの南東の空を見ながら一人呟いた。

「我、ラバウル航空隊を収容せり！」

その後、我が艦隊は機動部隊へ燃料補給の為、しばらく東進を続けると敵艦隊の攻撃を終え、帰投中のラバウル航空隊と思われる編隊を電探が探知した旨、大倉上曹が報告してきた。

「艦長、このままの針路ですとラバ空攻撃隊が我が艦隊の上空を横切ります。」

「そうか、藤一曹、機上無線電話の用意を頼む。」

「はッ！機上無線電話、よーそろー！」

通信員の藤一曹は、にこやかに答え素早く回線を繋ぎ

「機上無線電話、準備よし！」

これまた満面の笑みをしながら、艦長に報告した。

「ご苦労！」

艦長は答え南東の空を仰いだ。

「第三航空隊直衛機、こちら第五十一護衛艦隊。南東よりラバウル航空隊所属機と思われる編隊、接近中。距離二〇〇、機数百機、速度三百、高度四千。至急、確認されたい。」

「第五十一護衛艦隊、こちら第三航空隊第三直衛隊。了解、直ちに確認に向かう。」

艦長はまず上空のラバ空直衛機に連絡を入れ、攻撃隊の出迎えをさせたのだった。

しかし、便利になったものだ。

ほんの数ヶ月前までは艦隊内の連絡でさえ発光信号などでやり取りし、意思の疎通もままならなかったが今では艦隊内はもちろんの事、上空の戦闘機とさえ話が出来るのである。

我が帝国軍の無線技術の進歩には目をみはるものがあった。

艦隊電話も機上無線電話にしても直線距離で百ｋｍほどしか届かず、敵に傍受される恐れは無いという事なのだ。

これもやはりあの帝国科学技術研究所のおかげなのであろうか。

その時、大倉上曹が叫んだ。

「艦長！逆探に感あり！左三十度、周波数から我が軍の二二号電探のようであります！」

「駆逐艦梅より入電。我、味方潜水艦のシュノーケルを発見せり、距離二〇。」

「味方潜水艦より入電。我、イ二二潜なり、作戦海域に向かう途上なり、貴艦隊の作戦成就を願う。以上！」

戦場において、違う作戦に参加する味方同士が合いまみえるのはなかなか無い事であり、まして潜水艦は敵味方の識別が非常に困難

であった。

しかし、電探を装備して以来その発信する周波数帯により、それが味方のものであるとの判断が容易となり、錯綜する戦場での同士撃ちを防止出来るという、思わぬ副次的効果が最前線で現れていた。

「イ号二二潜水艦、こちら第五十一護衛艦隊。我の周囲三百ｋｍに敵影なし、貴艦の武運長久と無事帰還を願う。」

戸高艦長は自らマイクを取り、味方潜水艦に呼び掛けた。

するとイ二二潜が浮上してきたのだ。

「左四十度、味方潜水艦！」

メインマスト上、海面から二十五ｍにある通称、鳩の巣に配置された見張り員が報告してきた。

俺は艦長に許可を受け、艦橋左舷の見張り台に出てそこの二十糎双眼鏡から、左舷十ｋｍ先の海上を我が艦隊と並走しているイ二二潜を覗いて見た。

すると、司令塔に六人ほど上がり盛んに手を振っているではないか。

そこで俺も被っていた鉄帽を脱ぎ略帽を手に取り、それに答えたのだ。

ふと気が付き我が艦を見ると、戦闘配置に付いている一番機銃塔の兵達も盛んに手を振っていたのである。

「右三十度、航空機編隊！」

その声に慌てて右舷上空を見上げたが肉眼ではまったく見えなかった為、反対舷に駈けて行きそこの見張り員に替わってもらい、二十糎双眼鏡を覗くと見張り員が示した五十ｋｍ以上の遥か彼方に、我が最新陸上攻撃機である銀河の精悍な機影を連ねた編隊が、こちらへと向かって来る姿が垣間見えたのである。

その姿こそ、ラバウル航空隊の竜部隊の勇姿であったのだ。

しかし、近づくにつれ竜部隊と元山空の陸攻隊に少なからず異変があるのが見えて来た。

ある機は双発の片方の発動機が止まり、なんとか編隊に追い付いて行くのが精一杯であったのだ。

その様な、今にも編隊から脱落しそうな機体が他に何機も有り、激しい戦闘であった事をうかがわせたのだ。

「なんという姿だ、敵の母艦は撃破し護衛戦闘機はいなかったはずではなかったのか！」

その声を発したのは、戦闘指揮所で攻撃隊の異変を聞いて出て来た、戸高艦長であった。

「あれは多分、敵艦の対空砲火にやられたのではありませんか。」

俺は近づいて来る一機の一式陸攻を見て、戦闘機の機銃による損傷などではない事に気がついたのだ。

「先頭の編隊にいる一式陸攻の翼端を見て下さい。あの傷跡は大口径砲によるものです。」

「それほどまでに敵の対空火力が、凄まじかったというのか！」

艦長が俺の推測に答えると

「もしやすると敵軍も電探射撃装置を開発し、装備しているやも知れませんね。」

安藤特務少尉がいつの間にか我々の会話を聞いて、その長年の経験による勘を働かせ大胆な予言をした。

「もし、そうであればあれほど損傷機が多い事にも辻褄が合いますが…。」

俺は安藤少尉の予言に反論しようとした時、藤一曹が艦橋内から大声で叫んだ。

「艦長！上空の陸攻隊より入電！我、これ以上の飛行不可なり。海上に不時着後、収容されたし。以上ッ！」

その途端、飛行中の陸攻の六、七機が高度を下げ始めた。

これはえらい事になってきた。

本日は天気晴朗成れど波高し、であったのだ。

こんなうねりの有る海面に不時着などすれば、陸攻といえども木

っ端微塵になるのが関の山である。

しかし、艦長は平気な顔で

「了解した、直ちに静海面を作るのでそこに不時着されたし。と伝えよ。」

と言ってのけたのだ。

その直後、俺はハッとその意味に気付いた。

「艦長、もしやあれをするおつもりですか？」

「あぁ、こんな時はあれしかあるまい。」

と答えて艦橋へ入って行った。

あれとは、下駄履き（フロート）の水上偵察機を荒海上で収容させる際、大型艦が緩やかに舵を切りそのウエーキ（航跡）により、旋回内面に一時的に波の静かな海面を作り出し、そこに着水させていた事を応用しようというのだ。

そんな事をこの緊急時に思い付き、実行せんとしている戸高艦長を俺は誇りに思い、この駆逐艦松へ配属された事に感謝していた。

「香月大尉、艦長がお呼びです。」

俺はすぐに戦闘指揮所へ行くと、

「砲術長、すまんが救助部隊の指揮を執ってくれないか。」

と艦長に頼まれたのだ。

「はッ！お任せ下さい。」

俺は即決でその任を受けた。

艦長はその後、旗艦摩周と二隻の油槽船に収容要領を連絡し、俺は各駆逐艦に救助部隊の編成を命じ、我が松からも人員を出して臨時の救助班を編成させ内火艇を降ろし、不時着機搭乗員の収容準備に取り掛かった。

各艦から内火艇準備よしの連絡が入り、俺は艦橋に行き艦隊無線を使って松、竹の内火艇は旗艦摩周へという具合に各艇に指示した。

陸攻の方を伺うと不時着機は全部で八機らしく、その中の長機である一式陸攻が他の陸攻に手本を示すべく、進入するので旗艦摩周に静海面を作るよう、要望してきたのである。

それを受けて摩周は荒波に対し艦首を立てて航走を始め、その後ろから松と竹の内火艇がトンボ釣りよろしく、追走して行った。

そして摩周が大きく面舵を取り、右へ旋回するとその右舷側は荒波がおさまり、なるほど静海面が現れたのである。

時を失せずして、その静海面に陸攻が低空低速で進入して来て着水点に何かを投げ入れ、上昇して行った。

すると続いて一機の片肺の陸攻がその着水点目掛けて進入し、見事に不時着に成功したではないか。

それを見た松内火艇は直ちにその機に近寄り、機から脱出する搭乗員達を引き上げにかかったのだ。

着水した陸攻はすぐには沈まず、しばらくの間浮かんでいた為収容作業は以外と苦労せずに進んだ。

それからは各油槽船が静海面を作り、そこへ次々と損傷機が不時着して来て各内火艇が手際良く、ラバ空の搭乗員達を救助していった。

最初に静海面を作った摩周は搭乗員収容の為、その後停船し各内火艇がそこへ横付けして行った。

「摩周乗り組みの同期に聞いたんですが、あの艦の医務室は海軍病院並の設備が揃っており、尋常じゃない数の軍医が乗艦して来たと言っとりました。ですがまさか、この状況を予想していたなんて事は、無いですよね。」

俺の横に来てそう囁いたのは、航海長の大谷大尉であった。

彼は俺が前に考えた事と同じ疑問を抱いていた。

どうも我が艦隊は、誰かが事前に予測した通りの行動をとっているとしか思えないのである。

この新鋭護衛駆逐艦松といい、摩周艦載機の零戦の件といい、ラバウル基地での急な補給任務受令といい、敵索敵機にわざと発見され敵の航空攻撃を一身に引き受けさせられた事も…。

それに今の大谷大尉の話である。

もしやして、あの帝科研となにやら関係があるのではと、俺には思えてならないのだ。

「搭乗員の収容を完了しました！」

と通信員の藤一曹が報告して来たので、俺はその考えを心の奥に閉じ込めながら頭を振り、大谷大尉に苦笑いをして戦闘指揮所へと戻った。

我が艦隊はその後、ＭＯ機動部隊に燃料を補給すべく更に東進し、その間にも第五航空戦隊は二の矢である第二次攻撃隊を放ち、第十七任務部隊を完膚無きまでに叩き敵艦隊の撃滅に成功していた。

その日の夜になり、我が機動部隊と合同し無事、燃料の補給を終えた我が艦隊はようやく、ラバウル基地へと艦首を向けて帰還の途に着いたのである。

この闘いにより、我が松型駆逐艦と第五十一護衛艦隊の有効性が帝国軍の内外に示され、帝国海軍護衛駆逐艦の中核艦として大量生産され、海上護衛総隊に配備されていったのだ。

「いや～、これで魚雷があれば文句は無いんですが…。」

佐竹大尉のぼやきは半年後に違う形で解消される事になったのだが…。

今日も俺は艦橋で海上を睨み、地道な船団護衛任務に励んでいた……。

「我、ラバウル航空隊を収容せり！」（後書き）

暁の新生帝国の連携外伝として執筆した小説です。
弾井少佐の見ることの出来ない最前線の模様を描きました。
この第十五話をもって、しばらく駆逐艦松はお休みいたします。
閲覧、ありがとうございました。

第2章　―南方へ―

「総員、戦闘配置に付けッ！」

「砲術長！敵潜水艦、潜航しました！」

「敵潜の方位、左三十度、的速フタマル、距離、ヒトハチ！」

「第一砲塔、配置良し！」

「第一、第二投射基、配置良し！」

「第一、第二銃座、配置良し！」

「全艦、戦闘配置完了しました！」

「合戦準備夜戦に備え、砲雷撃戦用意！」

「左雷撃戦、左三十度、潜水艦！」

「水測長、音波探信儀用意！」

「的針的速、ヒトゴウマル、ヒトマル！」

「探信儀、準備良し！」

「打てッ！」

「敵潜、更に潜航中、深度ハチマル、距離ヒトマル。」

「第一投射基、発砲用意！」

「距離五！四、三！」

「撃ち方、はじめ！」

「てェーッ！」

ドドドーッ！

パパパシャーン！

ズズーン！

ゴゴゴォーン！

「命中！」

「旗艦に報告！我、敵潜を撃沈す、とな！」

昭和十七年六月二十五日―

ミッドウェー島、西方沖五百ｋｍ洋上―

旗艦摩周以下の我々第五十一護衛艦隊は、高速輸送船四隻を護り

つつ、ミッドウェー諸島へ大量のベトンと食料・飲料水を輸送し、帰りには何故か大勢の陸軍将兵らを載せ、一路横須賀基地への帰港の途中であった。

その途上、先の対潜戦闘となったが見事敵潜を撃破し、我が駆逐艦松の就役後における敵潜水艦累計撃沈数は三隻となり 、第五十一護衛艦隊としての総撃沈数は、十一隻を数えたのだ。

これは、帝国海軍の当初の予想を上回ったらしく帰港後、我が艦隊に海上護衛総隊司令長官伊藤整一中将から、部隊感状が付与されるという噂が聞こえて来ていたくらいであったからだ。

「どうだ、電探の具合は？」

と俺は、電測長の大倉上曹に温かいお茶を差し出し、戦闘直後から調子の悪かった捜索電探の案配を聞いた。

「ありがとうございます、香月大尉。先程、予備の真空管に取り替えましたのでかなり良くなりました。」

「しかし、戦闘中に起こらんくて良かったよなぁ。こんな不安定な兵器を装備させた帝国海軍は、一体何を考えているんだ！」

と俺は、帝国の生産事情も知らずに最新鋭電波兵器と喧伝され装備された、ニニ号電探におおいに憤慨していた。

2

それから五日後の六月三十日夕刻、我が艦隊は敵潜に出会う事も無く無事に横須賀基地へと帰り着いた。

「どうだ砲術長、腕試しに接岸まで操艦してみるか？」

「はい艦長、よろしくお願いします。」

「砲術長操艦、両舷前進原速、赤黒無し進路二百七十度。」

「頂きました砲術長、両舷前進原速、赤黒無し進路二百七十度、ヨーソロ二百七十度。」

と俺は、久しぶりに艦の操艦を戸高艦長から任され、指定された浮標までなんとか松をもっていき

「艦長、浮標係留終了しました。」

「了解。機械、舵よろしい。」

の艦長から命令が発せられ、機関科と操舵室に伝声管を通じて伝えられた。

「作業にかかっている者の他、別れ！艦内閉鎖用具収め！」

と艦内号令がかかり、艦橋から久しぶりに緊張感が解け、俺は先程の操艦の講評を聞くべく艦長に話し掛けた。

「久しぶりの操艦でしたので、緊張しました。」

「まぁまぁ、及第点ってところか。今は戦時だから砲術長あたりは、いつ艦長になってもおかしくないからなぁ、せいぜい精進することだ。」

と艦長が話したところへ通信員の藤一曹が報告してきた。

「艦長、海上護衛総隊から至急電です。」

「うむ、読め。」

「発　海上護衛総隊司令長官、宛　第五十一護衛艦隊。電文　各艦長、先任士官ハ、タダチニ海上護衛総隊司令部ニ、出頭セヨ。以上であります！」

「何事だ？接岸早々に我々を呼び出すとは。」

「はぁ、こんな事はラバウル以来ですねぇ。」

俺は、怪訝そうな顔の艦長を見ながら答えた。

「司令部行きの便を出す、第一内火艇用意。わしは、艦長室に居るから砲術長後は頼むよ。」

と言って戸高艦長は、艦橋を後にして行った。

「どうしたってんでしょうねぇ。ラバウルに着いた時も早々に呼び出し食らって、挙句の果てに最前線に急行でしたし…。もしかして、今回もすぐに出港ってな事になりませんよねぇ。」

いつもの調子で、佐竹大尉が艦橋の皆を代表して俺に聞いて来た。

「あぁ、貴様の言う通りかも知れんなぁ。帝国近海に敵艦隊現る！全軍ッ、直ちに合戦準備せよ！ってな事に為るかも知れんぞッ！」

「砲術長！脅かさんでください。皆が本気にしますよ。」

と、珍しく大谷大尉が横槍を入れて来たので、周りを見ると艦橋に居る全員が俺を注視しているではないか！

「貴様ら、何びびっとんだ！その時は、潔く突っ込むしかなかろう！…とにかく、行ってみにゃ分からんさ。」

と言って俺は、皆を睨み付け空威張りをして言い放った。

今は、戦時なのである。

いつ、己の命が無くなるか解らないのだ。

その覚悟が無い者は、この駆逐艦松に一人としていなかった。

その証拠に、艦橋で俺を見つめている全員の目は、その使命に燃える眼差しだったのだ！

3

それにしても今日の横須賀基地は、今までに無く我が帝国海軍の艦艇でごった返しているのには、少々驚かされた。

「内火艇の用意よろし！」

信号長から報告があり、俺は艦長室へ行きその旨を告げると

「うむ、それでは参るとするか。」

と戸高艦長は軍帽をしっかりと被り鞄を小脇に抱え、舷門へと向かった。

舷門では当直士官達が整列して待っており、舷梯には内火艇が発動機を駆けて待機していた。

「艦長、内火艇用意よろし！」

と副当直士官が報告し、俺が先に乗艇すると七月一日付けで本艦を離任する兵達が数名乗り込んでおり、すかさず敬礼して来た。

「行って来るから後は頼むよ。」

と艦長は、当直士官に声を掛けてから最後に内火艇に乗り込んで来て艇は発進したのだった。

間もなくして横須賀基地の岸壁に接岸すると、そこには他の艦からの内火艇が数隻先着しており、見知った顔ぶれが次々と司令部差

し廻しの車に乗り込んで行った。

我々も迎えの車に乗り、海上護衛総隊司令部へと向かったのである。

帝国海軍海上護衛総隊司令部庁舎―

地下三階、地上五階建ての巨大な庁舎に最初俺は、「なんだこりゃ！こんなどでかい庁舎なんか用意して海軍は、何考えてんだ？」と大いに疑問に思ったものだった。

だが、そんな疑問も二ヶ月を経ずして納得したのである。

俺が駆逐艦松に配属されたばかりの頃、海上護衛総隊に配置されていた艦艇は、おんぼろ駆潜艇八隻と水上機母艦が一隻という名ばかりの艦隊であった。

が四月の末に我が第五十一護衛艦隊が配備され、その後も続々と新造艦艇や他の艦隊から艦艇が編入されて今や百隻を超え、あの世界に冠たる連合艦隊に次ぐ、帝国海軍第二の艦隊に成っていたのだ！

「よぉ香月！元気だったか。」

大講堂に入るなり、そう声をかけてきたのは、俺の同期で第五十二護衛艦隊の駆逐艦樅（もみ）の水雷長をしている、川島晃海軍大尉であった。

「おう！川島か！こっちはいたって元気でやっとるわい。で、そっ

ちはどうなんだ？」

「こっちの事より、貴様んとこは凄いじゃあないか！同期の間でも有名だぞ。開戦以来この方、帝国海軍で敵艦を数多く撃沈しているのは航空部隊であり、その航空隊が空軍に横取りされた今、敵艦を撃破し続けているのは、残された機動部隊と我が海上護衛総隊の第五十一護衛艦隊だけだってな。」

「おいおい、貴様んとこの艦隊もかれこれ六杯も食っとるそうじゃないか！」

「貴様んとこに比べたら、すっかり影に隠れてしまっとるわ！それより、この召集の訳を聞いとるか？」

と川島に聞かれた時、

「司令長官入室！総員、気を付けッ！」

との号令がかかった。

4

「間もなく海上護衛総隊司令長官　伊藤中将が入られます。」

と参謀長が報じ、講堂に居た二百名程の海軍士官は、一斉に不動の姿勢を取った。

そして伊藤長官が舞台袖から壇上に登り、着席するとそれに合わせて我々は、着席した。

「これより、司令長官より訓示があるので静聴する様に。長官、お願いいたします。」

「うむ。諸君、日々の任務遂行、誠にご苦労である。本日集まってもらったのは、他でもない明日付けをもって帝国海軍艦船令が改正されるのを受け、我が海上護衛総隊の戦闘戦術が大幅に変更となった。ついては、各艦長と先任士官に本日と明日の二日間に渡って、講義を行う事とした。この非常時において諸君らの二日間は貴重な時間である事は、本職も重々承知している上での決定である事を諸君は、肝に命じて受講にあたってもらいたい。尚、これを契機に各艦には、艦長の次席として新たに戦術長が配属する事を命じる。以上ッ！」

訓示を終え長官が講堂から出て行くと、司令部参謀らが我々に長官がおっしゃられた、艦船令の改正の詳細が説明された。

「…よって、この度、昭和十七年六月二十日軍令海第二号が令達され、艦船令第五条の第一、二、三、四項及び第十七条が改正され、各艦に戦術長が置かれる事となり、…」

…この日の講義は、我らの意に反して夜遅くまで続いたのである。

翌朝、各艦に配置される戦術長が発表され、我が駆逐艦松には、海兵五十九期の長谷川政敏海軍大尉という士官が配属されて来た。

「海軍大尉　長谷川政敏は駆逐艦松に乗り組みを命じられ、只今着任致しました。」

と言って早速、戸高艦長に申告して来た。

「長谷川君といったか。我が艦は、家族みたいなもんじゃから、ひとつよろしく頼むよ。」

「はッ！こちらこそよろしくお願いいたします。」

「砲術長の香月と申します。よろしくお願いいたします。」

「おぉ君か！味方機を撃墜したというのは…、こちらこそよろしく頼むよ。」

俺は一瞬「むッ！」っとして出しかけた手を引っ込めた。

俺の過去の中で、一番悔やんでいて触れられたくない汚点をずけずけと言ってくるとは！

「いや、すまんすまん、悪気は無いのだよ。実は俺が居た戦術学校での座学で取り上げられた課題なのだよ。珊瑚海海戦における教訓のひとつとして、対空戦闘時に君がやった友軍誤射をいかにすれば防止出来るのかと、我々学生の間でもずいぶんと議論したものさ。

もし、己が香月大尉の立場であったならば、防ぎ得たのか！ってな。
その結果、あの状況では、誰が居ても結局同士撃ちは免れ得ん事であった、となった次第なのだよ。それで、出た結論がね…？
おぉ、ようやく機嫌を直してくれたか！
んで、結論を聞きたいかね？香月大尉。」

5

最初俺は、頭に来たが彼の話しを聞いている内に帝国海軍の変革が、こんなにも進んでいるのかと驚き感心していた。

「長谷川大尉、その話しは本当ですか？我が海軍の教育機関が、先日起きたばかりの戦訓を採り入れ論じているなんて信じられんのですが…。」

「あぁ！事実だとも。やっと帝国海軍のお偉方も近代戦の本質が解ってきたのだろうと思ったさ。その証拠に俺達の教官は、盛んに英語を使って講義しておってな、今後はストラテジー（戦略）においてはインテリジェンス（情報）を征した者、タクティクス（戦術）ではアーリーウォーニング（早期警戒）を征した者が、闘いを征すと言っておったよ！」

なんて事だろう！

俺は、この時確信したのである。

大艦巨砲主義から脱却し、今ようやく権威の呪縛から我が海軍は解き放たれたのだと！

「長谷川大尉、もしそれが本当であれば、私の失敗が今後の帝国軍に活かされ、二度と同じ過ちを繰り返させない事に繋がって行くのですよねぇ！」

「もちろんだとも、香月大尉！君の体験が俺達に対空戦闘の危うさを教えてくれたんだからな！」

なのであれば、我々現場の者達は、その汗と血を流す価値があるのだ！

「長谷川大尉、それでその結論は、どうなったのですか？」

「とどのつまり、敵機を我に近づけさせないって事だよ。正にアーリーウォーニング、早期警戒に徹するのが勝利の近道なんだとな。」

その為には、我が帝国軍は航空優勢は絶対に確保しなければ成らない事を、意味していた。

その後、戦術に関する講義を受け解散となり、我々はそれぞれの艦へと帰艦した。

舷門に着くと戸高艦長が当直士官に

「戦闘指揮所に、士官集合をかけてくれ。」

と言って我々を引き連れ艦橋後部の戦闘指揮所へ向かった。

駆逐艦松に配属されている全士官が指揮所に集まって来たのを確認した艦長が口を開いた。

「本日付けで本艦に戦術長が配属となった。ここに居る長谷川政敏大尉である。戦術長とは…。」

その時、藤通信員が入って来て俺に紙片を渡してきたのでそれを見ると、至急電と書かれているではないか！

「失礼します。艦長、旗艦より至急電が入りました。」

「うむ、読め。」

「発　第五十一護衛艦隊司令長官、宛　隷下全艦艦長。本文、大島沖南五十ｋｍ敵潜水艦発見ノ報有リ、
艦隊ハ速ヤカニ現場海域ニ進出シ敵潜水艦ヲ捜索コレヲ撃破ス。
艦隊ハ準備出来次第出航ス。
時間、一六四五。
以上ッ！」

「諸君！聞いての通りだ。直ちに出航準備にかかれ！」

さぁ、大変だ！

我々は、別れの敬礼もそこそこに出航準備の為、それぞれの持ち場へと走り出した。

「準備出来次第出航する、航海当番配置に付けッ！」

の艦内号令がかかると今まで静かだった艦は、蜂の巣をつついた様な騒ぎになったのである。

6

艦橋で俺は、甲板指揮を執り駆逐艦松は急速に出航の態勢を整えていった。

前部甲板では、水雷長の佐竹大尉が揚錨作業を指揮しており、艦橋にまで彼の元気の良い号令が聞こえて来た。

「艦長、旗艦より敵情についての詳細が送られて来ました。」

早速、戦術長の長谷川大尉が報告し、現状の把握に当たった。

それによると今日、新たに発足成った帝国空軍館山航空隊に所属する、哨戒機二式大艇改が基地帰投中、電探に不審な反射波を発見直後、逆探に我が軍では使用していない電波を受信し、すぐにその電波が消えたという報告が有り、付近を飛行中の木更津航空隊の哨戒機が現場海域に急行したが、発見に至らなかったと言うのだ。

「機関科、出航準備良し。」

「後部甲板、出航準備良し。」

「前部甲板、出航準備良し。」

「艦長、出航準備完了しました。」

各部署からの報告を受けた俺は、戸高艦長に報告すると

「了解。通信長、旗艦に発信、我、出航準備良し。時間、一七〇五。

となッ！」

間もなくして旗艦から出航命令が発令されると、

「出航用意！」

と艦長が号令を発し、高らかに出航ラッパが鳴り響いた。

前部甲板からは、先ほどにも増して佐竹大尉の威勢の良い号令が聞こえて来た。

「錨鎖放て！」

「左後進微速、右前進微速、取り舵。」

と艦長が号令をかけ、我が駆逐艦松は横須賀基地を出航し、帝国海軍海上護衛総隊に所属する第五十一護衛艦隊は、旗艦摩周を中心に綺麗な輪形陣を作り、敵潜のひそむ大島沖へと向かったのである。

「それにしても、こんな近海に敵潜水艦の侵入を許すとは由々しき問題ですね、砲術長。」

航海長の大谷大尉が、海図を睨みながら俺に話し掛けて来た。

「ああ、ここ二、三日我が艦隊をはじめ敵潜を狩るべき艦隊は、ほとんどが横須賀基地に入っとったからなぁ、その隙を突いて来たんだろう。」

「って事は、空軍の哨戒機もあんまり充てに出来んちゅう事ですかねぇ。」

と我々の会話に水雷長の佐竹大尉が参加して来た。

「いや、満更役に立たんと言う訳でもなかろう。現に警報を発したのは、その空軍機なのだからなぁ、砲術長。」

と長谷川大尉も会話に加わった。

「ま、空軍の哨戒機は対空、対水上艦艇を第一に警戒しているからなぁ。潜水艦の様なちっぽけな目標は、専門の対潜哨戒機が出来るまで我が護衛艦隊に休んでる暇は無いって事じゃ。」

そう言って戸高艦長は、我々の会話に終止符を打った頃、我が艦隊は大島沖南五十ｋｍの現場海域に到着していた。

7

「上空の木更津航空隊哨戒機より入電！我、敵潜ヲ見失ウモ当海域ニ潜伏ノ公算大ナリ、貴隊ノ健闘ヲ祈ル。以上！」

「旗艦摩周より入電！対潜警報発令。松、竹、梅、桃ハ主隊ヨリ分派シ敵潜水艦ヲ捜索、撃滅セヨ。現場指揮ハ松ガ行エ！」

「通信員、旗艦摩周へ打電。松、了解。コレヨリ、支隊ノ指揮ヲ執ル。以上！」

戸高艦長が旗艦への返信を命じ、

「総員、戦闘配置に付け！」

と号令をかけた。

俺は、いつもなら艦橋トップへと駆け上がるところだが、今日からは戦闘指揮所で第一分隊の指揮を執るので、艦橋のすぐ後ろの戦闘指揮所に入った。

間もなくして艦内電話を通して報告が入って来た。

「射手、配置良し。」

一等最初に、國本兵曹長が言って来た。

「測距儀、配置良し。」

本日付けで測距儀長となった、伊藤一等兵曹から元気な声が聞こえた。

「第一砲搭、配置良し。」

「第一銃座、配置良し。」

そして最後に、最後部に在る第二砲搭から配置良しが伝えられ、

「砲術科、戦闘配置良し！」

と俺は、艦橋から入って来た艦長に報告したのである。

それらの報告を聞いた艦長は、

「合戦用意、夜戦に備え！」

「戦術長、通信員に一〇一駆逐隊全艦を対潜哨戒隊形作くるよう伝達してくれ。発動、二〇一五とな。」

艦長から戦術長を介し、隊形変換の命令が発せられた。

現在の我が隊の隊形は、一本棒の一列縦隊であったがこれを横一直線に並べ、それぞれの間隔を三ｋｍにする事で左右十ｋｍ以上の海域の潜水艦を捜索出来る様にするのだ。

この隊形で強速の時速二十八ｋｍを維持し、二十分間航行すると十×十ｋｍの面海域の捜索が出来るのである。

この様にしてある地点を基点とし、敵潜の潜伏が予想される海域

をしらみ潰しに探索して行くのだ。

しかし、これが又、とてつもない忍耐力を我々に強いるのである。

敵潜は、己を探し回る水中探信儀の音を聴いて、発見されじと艦の危険深度一杯に潜り、機関を止め、物音ひとつ発てずにじっと潜んでいるからだ。

「艦長、どうやら長丁場に為りそうですから、戦闘配置を哨戒第三配置にしませんか？」

戦術長の長谷川大尉が進言し、艦長はこれを受け入れ艦隊に配置変更の令が伝達された。

「砲術長、そろそろ四時間になりますが、ほんとうにこの海域に敵潜がいるんですかねぇ。」

しびれを切らし、佐竹大尉が俺に聞いて来た。

「ここは、辛抱するんが肝心だぞ。いざ、発見と成ったら貴様が引導を渡すんだからなぁ。」

その時、水測長の大友兵曹長が叫んだ！

「探信儀、感有り！三十度、距離五千！敵潜水艦らしい！」

8

「総員！戦闘配置に付け！」

戸高艦長は、すかさず号令をかけ、長谷川戦術長が以後の戦闘指揮を引き継いだ。

今後の戦闘は、戦術長が全ての情報を総合的に判断して、指向武器の選定などを行い指揮し、艦長はそれらの助言を受けて指揮するのである。

「水測長、敵味方識別探信儀、打て！通信長、各艦へ通達、攻撃は松、竹が行う、梅、桃は攻撃艦を支援せよ！艦橋、面舵三十度、ヨーソロ！」

長谷川戦術長は、矢継ぎ早に命令を発した。

それに従い、大友水測長が水中探信儀を使ってモールス信号を水中に放った。

これは、錯綜する戦闘海域で味方潜水艦への誤射を防ぐ目的で新たに採用された、新戦術であった。

「駆逐艦竹より、入電！我、目標ヲ探知ス。左十度、距離四千！」

「戦術長、目標より、応答無し！的針ヒトヒトマル、的速四！目標増速の模様！距離三千五百！」

「戦術長了解！艦長、目標を敵と判定します。攻撃を行います。」

「艦長了解！総員、砲雷撃戦用意！目標、前方敵潜水艦！二式爆雷、撃ち方はじめ！」

「水雷長！目標、前方敵潜水艦！一番投射機、撃ち方はじめ！」

戦術長が武器を選定し、佐竹水雷長に命じた。

「水雷長了解！目標、前方敵潜水艦！一番投射機、撃ち方はじめ！」

「水測長了解！目標諸元入力終わり！的針変わらず、的速六、距離三千！」

敵潜の攻撃可能距離到達まで、後五分であった。

「よーい、てぇーッ！」

ドドドッー！

いつもの様に、二式爆雷投射機からの発射音と振動が戦闘指揮所内でも感じられ、夜空高く小型爆雷が撃ち上がる姿が脳裡に浮かんでいた。

「目標、的針フタナナマルへ変針！的速十五へ増速！」

「ちぃ！外されたな！」

俺の横にいる佐竹水雷長が舌打ちして言った。

するとまだ命中の成否も判明しない内に長谷川戦術長が命じたのである。

「三番投射機用意！諸元入力、急げ！」

「三番投射機、諸元入力しますッ！」

間もなくして初弾の全てが外れた事が判った。

「敵潜の直上通過！…後方に抜けました！」

「三番投射機、諸元入力終わり！」

「敵潜との距離、五十、…百、…百五十！」

「よーい、てぇーッ！」

ドドドッー！

二式爆雷の第二射が放たれた。

戦闘指揮所に居る全員が固唾を呑んで、命中の爆発音が聞こえて来るのを待っていると、艦底から振動が伝わって来た次の瞬間！

ドドドーン！

と海中の爆発音が響いて来たのである！

「第二射！命中ッ！」

大友水測長が叫んだ！

「ヨッシャー！」

「帝国！バンザイ！」

爆発音を聴いた乗組員が艦内のいたる所で歓声を挙げていた。

しかし、その歓喜も長くは続かなかった。

「敵潜水艦！浮上して来ますッ！」

9

「…？、砲術長！たった今見えてきました！敵潜が中央から真っ二つになって沈んで行きます！」

「そうかッ！やったか！戦術長、敵潜水艦の撃沈を確認！」

「戦術長了解！艦長、目標を撃沈したと判定します。」

「艦長了解。攻撃止め！対潜戦闘用具納め！通信長、司令部に伝達。我、敵潜水艦一隻、撃沈確実。となッ！」

我が駆逐艦松は、通算十二隻目の敵艦を葬り、意気揚々と旗艦に合流すべく北上を開始した。

「戦術長、我が艦での初の実戦は、いかがでしたか？」

俺は、艦橋を出て自室へ向かう長谷川大尉の後を追い、背中越しに先ほどの対潜戦闘の出来を聞いてみた。

「ん？…砲術長か。噂に違わず見事だったよ。さすが、我が海軍一の敵潜撃沈数を誇るだけは有るな。それもこれも艦長以下、君等の日々の演練の賜物なのだろう。」

「及第点を頂けたと思っておきます。」

「いやいや、世辞でも何でも無いよ。この艦の性能が素晴らしいの

はもちろんだが、それを生かすのはあくまでも我々軍人なのだよ、香月大尉。どんなに優れた武器を持とうとも、それを間違う事無く正解無比に扱える兵が居なければ、それはただの鉄の塊に過ぎんのだよ。それを君等は、先ほどの戦闘で自分の手足の様に操った結果、撃破したではないか！少なくともそれは、褒め称えられるべきではないかね？」

俺は、その言葉を聞いて直立不動の姿勢をとり、長谷川大尉の去り行く背中に海軍式の敬礼をしていた。

翌日の朝、我が艦隊に激震をもたらす一通の緊急電が入った。

「発　海上護衛総隊司令部、宛　第五十一護衛艦隊。
情勢ー七月二日未明、陸軍南方軍一部部隊ト連絡ガ途絶セリ。
〇五五〇、国防府ハ南方軍隷下ニ叛乱ヲ起コセシメル部隊有リト判断ス。
・各隊ハ令有ルマデ、現任務ヲ継続セヨ。
・各隊ハ令有ルマデ、警備ヲ強化、情報収集ニ努メヨ。」

「叛乱だとッ！？」

水雷長の佐竹大尉が一番先に声を上げ、艦橋内が色めき立った。

「こんな時期に一体、どこの部隊が起こしたというのだ！」

いつもは静かな航海長の大谷大尉までもが、珍しく声を荒げたのには、驚かされた。

確かに今、帝国軍は戦時という異常事態の真っ最中であり、ただでさえ強大な米軍を相手にしているというのに、陸軍の能天気さには呆れてしまい俺は、声を出すことも出来なかった。

「やはり、最近陸軍中央から排除された統制派の連中の仕業でしょうかねぇ。」

そう言ったのは、ついこの前まで陸に上がっていて中央の情勢に明るい長谷川大尉だった。

「まぁ、詳しい事は追って判るであろうし、我が艦隊には関係の無い話しだよ。それより、皆には騒がず、各自の職務に精励するよう伝達してくれたまえ、戦術長。」

戸高艦長は、静かにそう言うと腕を組んで目を閉じた。

それを聞いて艦橋に居た者達は、なるほどと思い直し、それ以降騒ぐ者は居なかったがしばらくして艦長の予言は、覆される事となったのである。

10

その日の午後、我が艦隊に下された命令は、東京湾口から室戸岬沖までの長さ五百ｋｍ、沖合三百ｋｍに渡る帝国近海域を第五十二護衛艦隊と供に対潜掃討を行え。というものであった。

それまで緊急出撃させ、その任務を完遂して帰還途中の艦隊に新たな任務を命じられた事など無く、当初は司令部による我が艦隊と第五十二護衛艦隊を競わせる、部隊点検くらいに考え気楽に任務をこなしていた。

確当海域の半ば程の探索を終えた七月四日の夜、そんな緊張感の無い戦闘指揮所で俺が三直、哨戒長として艦長に代わり艦の指揮を執っていると、急に電測長が叫び声をあげた。

「逆探探知！左二十度感強い！現在識別中！」

「左二十度だと？識別急げ！」

「十ｃｍ波…、これはッ！米潜水艦用水上捜索電探であります！」

「米潜水艦だと！電探、左二十度、感有るか？」

「…、目標探知！左二十五度、距離四〇！」

「総員！戦闘配置！通信員、司令部及び僚艦に通報。敵潜水艦探知、左二十五度、距離四〇！」

それまで、静かだった艦内が一気に騒がしくなった。

「どうした！砲術長！」

戸高艦長が、息咳切って戦闘指揮所に入って来た。

「電探が敵潜水艦を探知しました！」

「先ほど逆探に感が有りまして、どうやら敵も電探を装備しはじめた様です。」

「砲術長！それは本当か！」

後から入って来た戦術長が聞いてきた。

「はい、電子戦…、敵の言うＥＷでしたか、これを積極的に運用しなければならない時期に来ているのかも知れませんね。」

俺は、戦術長にそう答えながら砲術学校でのある教官の言葉を思い出していた。

「帝国は今、未曾有の大戦の只中に有るが諸君にこれだけは、憶えておいて欲しい。これからの戦は第一に情報であり、第二に兵坦能力である。戦場に出た時には、電子戦をいかに有利に展開出来るかによって戦いが決まるのである。兵器の優劣が論じられるのは最後であって、更に電子戦を行う能力において同等の場合の時のみである！いくら優秀な武装を揃えても、それを最善の時に、最良の方法で、それを成す為に持続し得る数を揃えなければ、今後の戦いに勝つ事など砂上の楼閣なのだ！諸君らは、これを肝に命じ、敵から得られた情報を綿密に解析し、今後行われるであろうＥＷ、つまり電

子戦に勝利しなければならないのである！」

帝国は今、幸いにしてあの時の教官が言った電子戦において米軍に対し、一日の長がある。

この戦略的に有利な状況を作り出していたのは、あの帝国科学技術研究所絡みの兵器群であり、これを戦術的勝利に導くのが我々最前線に立つ軍人の役目であった。

この夜の対潜戦闘も、我が艦隊の勝利に終わったのは、言うまでもなかった。

昭和十七年七月七日、我が艦隊は無事任務を終え、横須賀基地に帰投した。

そこに待っていたのは、転属の命令書であった。

香月新作、七月七日付けをもって帝国海軍少佐に任じ、駆逐艦榊の艤装員長を命ずる。

駆逐艦榊とは、横須賀海軍工廠で建造中の松型駆逐艦の四十一番艦であり、俺はその艦の艤装員長、つまり艦長を拝命したのである。

また、戸高艦長にも転属命令がくだり、中佐に昇進の上、駆逐艦榊が所属予定の第五十六護衛艦隊司令に大抜擢されたのだった。

「戸高艦長、ご栄転おめでとうございます。」

「あぁ、君もいよいよ艦長だな。それにしても、いきなり艦隊司令とは、まいったよ。我が海軍も余程の人材不足とみえる。」

「そんな事は、ありませんよ。この駆逐艦松は就役以来、目を見張る活躍をして、我々駆逐艦乗りの話題を独占してましたからねぇ。」

そう語ったのは、同じく本日付けで少佐に昇進し、この駆逐艦松の二代目艦長を拝命した長谷川新艦長であった。

俺が今日まで語って来た「駆逐艦松一代奮戦記」は、一旦終わりとなる。

新たに「続　駆逐艦松　戦闘日報」として、新艦長の長谷川少佐が語ってくれよう。

「さらば、駆逐艦松よ。」

俺は、そう言って殊勲艦を後にした。

１０（後書き）

短い間でしたがご愛読頂き誠にありがとうございました。
この続きは、モバゲーでの私の友人、強い子のミロさんが「続　駆逐艦松　戦闘日誌」として掲載中です。
よりリアルな戦闘描写をお楽しみ下さい。

また、「暁の新生帝国」本編は、以下のブログで公開しております。

ｈｔｔｐ：／／ｔａｍａｉｈｉｒｏｓｉ．ｂｌｏｇ．ｏｃｎ．ｎｅ．ｊｐ／ｔｅｉｋｏｋｕ／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4911e/

駆逐艦松 一代奮戦記【暁の新生帝国外伝第三弾】

2010年10月13日21時53分発行